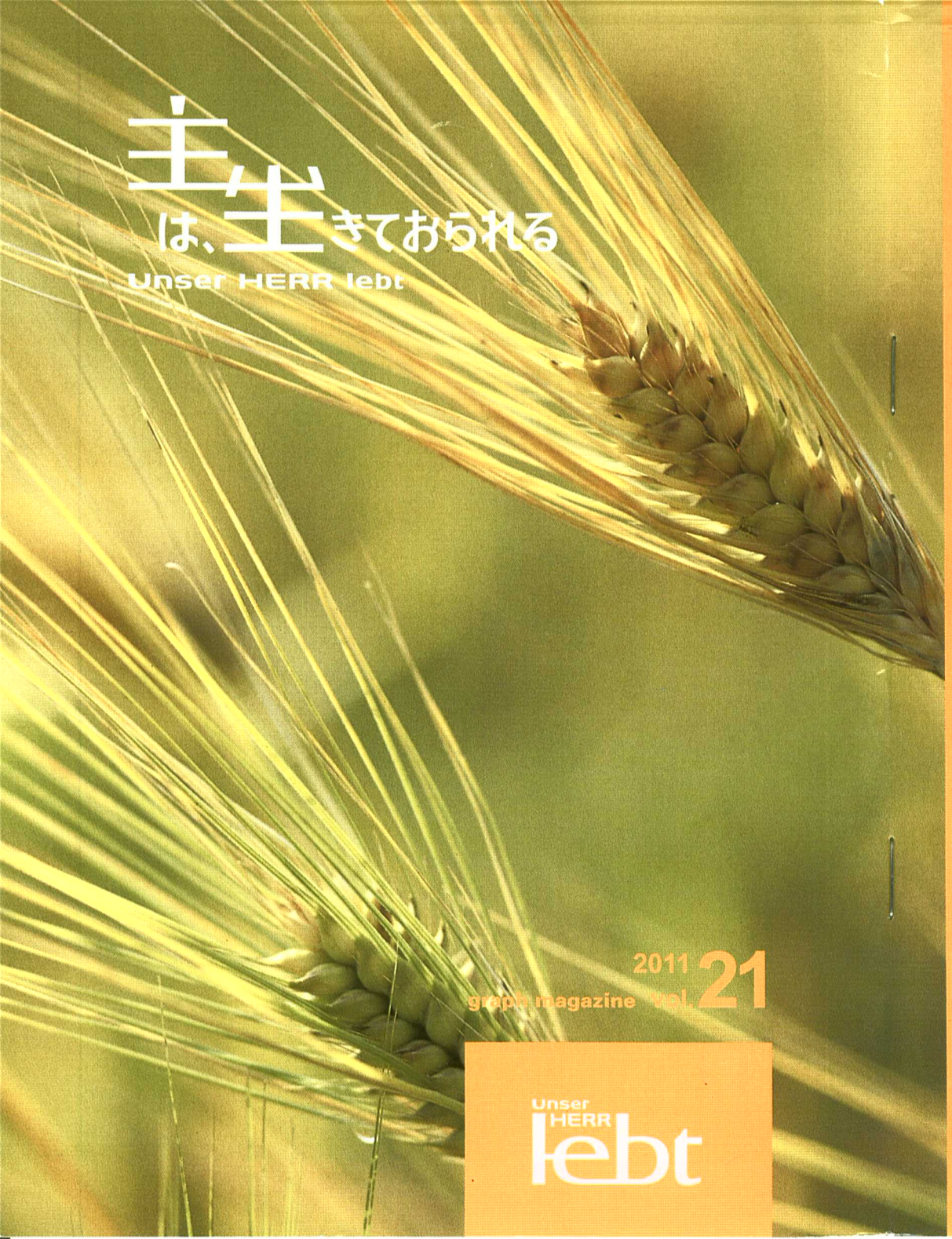
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2011 graph magazine vol.21

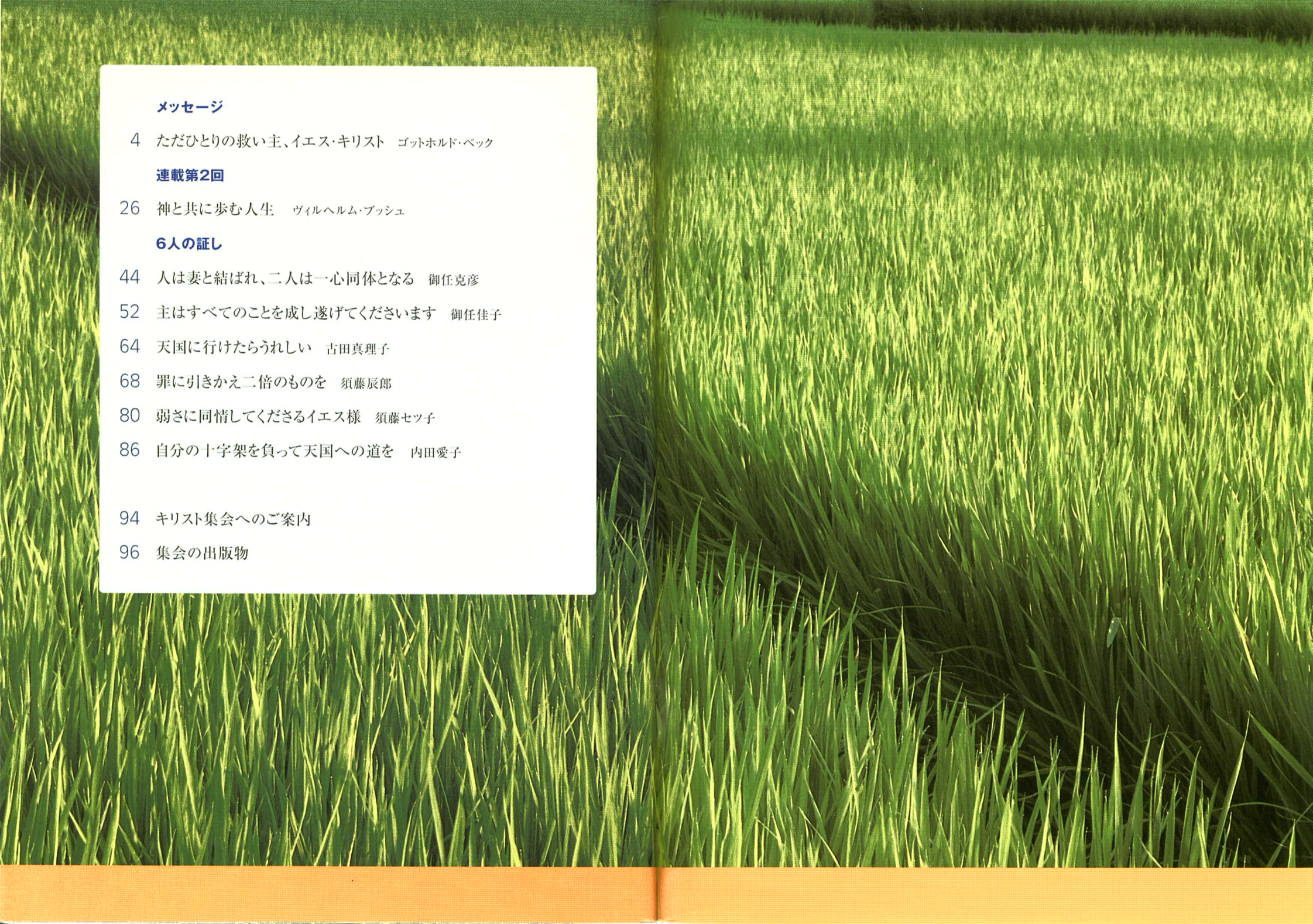
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.21 定価100円（本体95円）



メッセージ

4 ただひとりの救い主、イエス・キリスト　ゴットホルド・ベック

連載第2回

26 神と共に歩む人生　ヴィルヘルム・ブッシュ

6人の証し

44 人は妻と結ばれ、二人は一心同体となる　御任克彦

52 主はすべてのことを成し遂げてくださいます　御任佳子

64 天国に行けたらうれしい　古田真理子

68 罪に引きかえ二倍のものを　須藤辰郎

80 弱さに同情してくださるイエス様　須藤セツ子

86 自分の十字架を負って天国への道を　内田愛子

94 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物



ただひとりの救い主、イエス・キリスト

ゴットホルド・ベック

一人の銀行家と実業家が、ある一室で向かい合って座っていました。この実業家は体を前に乗り出して、とても熱心にまじめに話していましたが、相手の銀行家は突然彼の話をさえぎりました。

「バカバカしい！」と銀行家はムッとしたように傲慢な口調で言いました。

「どうしてバカらしいと思うのですか」と実業家は尋ねました。

「どうしてだって？私のように聡明な人間に対して、君はどうしてなどと尋ねるのか？まったく馬鹿げている」と言って銀行家は皮肉な笑いを浮かべました。

「ええ。私はあなたがなぜそう思われるのか、お聞きしているのです」と実業家は冷静に答えました。

銀行家はいらいらして、「あなたは本気でイエス・キリストの十字架の死が私の代わりになされて、神がそれで満足するということを私に信じさせようと思っているのかね？そんな理屈はやめてくれ。私のことは私が努力して救うしかないじゃないか！」と、怒りにふるえる声で言いました。

「わかりました。あなたの悩みがどこにあるか、いま私はわかりました。あなたはご自分が自分自身の道を歩く権利を持っている、と考えておられるのですね。ですから、神の救いのご計画をしりぞけ、軽蔑しているのです」と実業家は言いました。

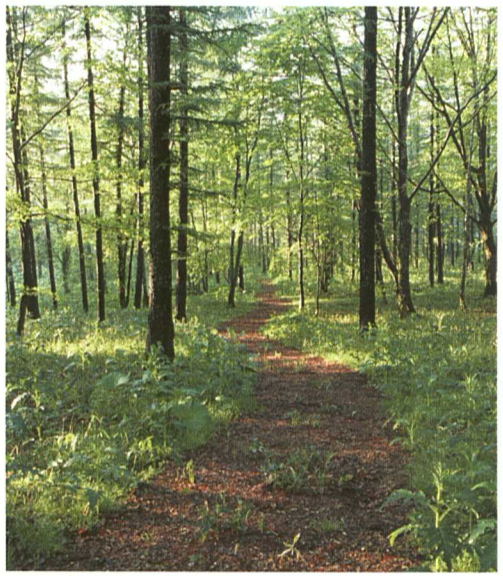
「それはどういう意味かね？」と銀行家がいぶかって尋ねると、実業家は「一つお聞きします。いま誰かがあなたのところに来て、少しお金を貸してほしいと言ったとします。そのとき、お金を貸すための条件を出して指図するのはどちらでしょうか。銀行家のあなたですか、それともお金に困っている人ですか」と聞きました。

銀行家は「それはもちろん、私に決まっているさ。その男は金を受け取る前に私の条件を聞かなければならないからね」と答えました。

実業家は「その通りです。しかし、今はあなたがその男と同じ状態にあるのです。あなたはあわれな救い難い罪人で、滅び行く状態にあるのです。そして、神様は銀行家です。あなたの方が神である主のもとへ行って恵みと赦しをお願いしなければなりません。この場合、神の救いを得るための条件を定め、指図する権利を持っているのはどちらでしょうか」と聞きました。

銀行家は「私はそんなことは今まで考えたこともなかった」と驚いたように言い、「もちろんその場合、私は指図する権利をもっていません。権利をもっているのは神だけです」と答えました。

実業家は「あなたは自分自身で救いの道を作ろうとしていたのです。物乞いは命令することができず、ただ受け取るだけだということをあなたは忘れていたのです。大銀行の主人である神様は、ご自身による救いの計画をいつも提供しておられるのですよ。もう、自分の道を行くのをやめて、神である主の道を行こうとは思われませんか。神は、神ご自身の道であなたに会うのを待っておられます。いまあなたは、主に会うために用意をなさいませんか」と話しました。その時、新しい光が銀行家を照らしたので、「はい。神である主が私を助けてくださいますように」と、その銀行家は小さな声で答えました。



ただひとりの救い主、イエス・キリスト

I 神の救いのご計画

「神の救いのご計画」とはどういうものでしょうか。次の聖書の個所はよく知られています。

地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。（イザヤ　45・22）

人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。（ルカ　19・10）

そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。（使徒　16・30〜31）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。（1テモテ　1・15）

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。（ローマ　10・9）

ここに出てくる「救われる」ということばほど人々によって考え方のまちまちなものは、聖書のことばで他にはみられません。いったい「救い」の本質はどこにあるのでしょうか。

神様はどう言っておられるのでしょうか。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。（箴言　14・12）

人間の目には正しいと見えた道が、結局は死へと向かっていたということは何という悲劇でしょう。ところが、初代教会においてもこのような間違った道が教えられたことがありました。そのことについて、次のように書かれています。「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。』と教えていた。」（使徒　15・1）とあります。この教えはパウロの伝えた福音に反するものでした。パウロは救われるために割礼を受けることは必要がないばかりか、おきてを守ることも必要でないことを証明しています。こんにちも、神様のみこころについて誤った考えを持っている人々がたくさんいます。私たちはまず、この誤った見解に目を向けてみたいと思います。



Ⅱ神の救いについての誤った考え

①宗教

多くの人々は、その人が信じている「宗教」が自分を救うと考えています。しかし、キリスト教のプロテスタントにしろカソリックにしろ、ユダヤ教、またマホメット教、神道、仏教にしろ、どんな宗教も人間の魂を救うことはできない、ということを私は言いたいのです。「救い」はイエス・キリストにのみあります。

マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。（マタイ　1・21）

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。（使徒　4・12）

あなたが救われるとしたら、イエス・キリストによって救われなければなりません。それ以外には道がないのです。主イエス様はただ一人の救い主です。どんな宗教もいのちを与えることはできません。救われるためには、「新しいいのち」を得なければならないのです。主イエス様は次のようにおっしゃいました。

まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ　3・3）

この聖書の箇所でイエス様と話しているニコデモは、信心深い人でした。しかし、彼は救われていませんでした。ですから、主イエス様は彼に「あなたは新しく生まれなければならない」とおっしゃったのです。

使徒の働き10章に記されているコルネリオも、大変敬虔な人で、神を恐れ、多くの施しをし、いつも神に祈りをしていました（使徒10・2）。また、彼は人々に好感をもたれていました。けれども、このコルネリオもまた救われなければならなかったのです。

また、パウロはおそらく、当時もっとも信心深い人間だったと言えるでしょう。彼は子どもの時から信仰深く育てられました。パウロは、神である主に熱心に仕える者だと自負していました。割礼を受け、律法をおろそかにせず、守っていました。それにもかかわらず、神様の目から見れば、彼もただの罪人だったのです。自分が罪人であることを知らない、「失われた人」だったのです。彼もまた救われる必要がありました。なぜなら、パウロは「神の義」を持っていなかったからです。実のところ、彼は敬虔な罪人でした。彼は主イエス様を知るようになってから、自分自身を「罪人のかしら」と呼んでいます。彼は次のように証しています。

私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私

はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

（ピリピ　3・4～9）

宗教はパウロもコルネリオもニコデモも救うことができませんでした。宗教がどうして私たちを救うことができましょうか。救われるために宗教的生活に頼ろうとするなら、それは間違った、望みのない希望にしがみついているのと変わりありません。もし、宗教が救うことができるとしたら、なぜ主イエス様は死んだのでしょうか。もし、私たちが宗教によって救われるのなら、十字架の死は必要なかったでしょう。

ただひとりの救い主があるだけです。それは宗教ではなくて、主イエス様ご自身です。

②道徳

二番目の誤った見解は「道徳」です。多くの人々は善い生活を送っているから、救われているものと信じています。その人々は救われるために自分たちの道徳に頼っているのです。

しかし、もし、道徳的で誠実な生活が私たちを救うことができるのなら、どうして主イエス様は死なれたのでしょうか。もし、私たちが自分で自分を救うことができるのならば、私たちは主イエス様を必要としません。もし、私たちが自分自身の努力で天国に入れるとしたら、その人は天国で言うことでしょう。「私を見なさい。私は自分の力でここに来たのだ。私は道徳的で善良で、誠実な人間だったから、

神は私をここに入れてくださったのだ。私は救い主を必要としなかった。私はイエス・キリストなしで、自分で自分を救ったのだ」と。

しかし、このように言える人間は、この地上にだれひとりとしていません。なぜなら、神である主に満足していただけるような善い生活を送れる人は、どこにもいないからです。

私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。（イザヤ　64・6）

義人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・10）

聖書には、すべての人間は罪人であると書いてあります。ですから、すべての人が救い主を必要としています。もし、私たちが正しくて、自分の義を持っているのなら、主イエス様は決してこの世に来られることはなかったでしょう。

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。（ルカ　5・32）

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。（マタイ　9・13）

私たちは完全でしょうか。正しい者でしょうか。もしそうであるなら、私たちはイエス・キリストを必要としません。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほ

かの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようでないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

（ルカ　18・9～14）

主イエス様は、取税人を義となさり、自分を義としたパリサイ人を裁かれたのです。私たちは、自分が正しくない者だということを知っているでしょうか。自分の心の中を人に知られるのは困ると思っていないでしょうか。私たちは聖い神のご臨在のうちに立つことができる者でしょうか。

私たちは自分の部屋にほこりがないと言うかもしれません。しかし、太陽の光を入れてその光線を見ると、そこにほこりが見えます。部屋中、いたる所にほこりがあります。私たちは「自分は正しい」と言うかもしれませんが、もし、神様の栄光の光が心の中に入ったら、どうでしょうか。そこには、滅び、不純、汚いしみがあるのがわかります。つまり、罪があるのです。

大漁の奇跡を目の当たりにしたとき、ペテロは「私は、罪深い人間です」（ルカ　5・8）と主の足もとにひれ伏しました。主のご臨在を見たイザヤは「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で・・しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」（イザヤ　6・5）と言いました。ヨブは「今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」（ヨブ　42・5～6）と叫んだのです。

これらの男たちは、おのおのの時代においてもっとも善良で、道徳的で、そして正直な人々でした。

しかし、彼らは主を見たとき、自分自身をも見たのです。私たちの場合も同じです。私たちの生活はペテロやイザヤやヨブのように、あるいはそれ以上に正しいと言えるのでしょうか。彼らの道徳的な生活が彼らを救わなかったのと同様に、私たちも自分の道徳によっては救われないのです。

私たちは自分が決して正しくないということを知っているでしょうか。もしかすると、自分を他の人間と比べて、自分のほうがましだと思っているかも知れません。しかし、もし主である神の基準によって自分自身を測るなら、何と足りないことか、と知るでしょう。神様は「完全な義」を求めておられます。そして、この完全な義をもっているのは、ただおひとりです。そのただひとりの方とは、主イエス様です。もし、私たちが主イエス様の義を身に着けるなら、そのとき人は神様に受け入れられるのです。もしそうしなければ、私たちは永遠に滅ぼされます。自分の義は役に立ちません。自分の義は決して十分なものではありません。私たちは最善を尽くすことはできますが、その最善は神である主を満足させることはできないのです。

ただ主イエス様の義のみが、私たちを救うことができるのです。私たちは放蕩息子と同じように、汚い着物を脱ぎ棄て、主イエス様の赦しを請わねばなりません。「私は罪人です。そのほかの何者でもありません。主イエス様は私のすべてです」と心から、告白すべきです。かつて、英国のビクトリア女王は逃亡兵に対して、彼らが自分自身で逃亡兵であることを正直に認めればすべて赦しました。つまり、彼らは自分自身の罪を認めなければならなかったのです。それと同じように、私た

ちが赦していただくためには、自分の罪を心から認めなければなりません。

③行ない

三番目の誤った見解は「行ない」です。多くの人は何かの働きや良い行ないをすれば、救われると信じています。それらの人々は悔い改め、節制、施しといったことを行ない、犠牲を捧げ、祈ります。また、彼らは病人や囚人を訪ねます。そして、長期間の巡礼を企てたり、自分の肉体を痛めつける苦行をしたりします。そうすることによって、天国へ入れるものと信じているのです。

しかし、主イエス様と一緒に十字架につけられた強盗は、救われるために何かしたでしょうか。強盗の両手は十字架に釘付けとなっていました。彼は何一つできなかったのです。しかし、それにもかかわらず、主イエス様は彼を救ってくださいました。

人間の考えた救いの計画は、「する」ということを強調します。しかし、神様は、「した」とおっしゃいます。人間は必ず何かをやりたがるものであり、何かを支払おうとします。人間は救いを、自分の働きで自分のものにしようとします。

しかし、神である主はすでに「終わった」とおっしゃっています。もうそこには、やるべきことは何も残っていません。主イエス様がすべてをなされたのです。真の救いは「贈り物」なのです。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

贈り物をもらうために、何か働くことがありますか。贈り物をもらうからと言って支払うなら、もはやそれは贈り物ではありません。贈り物のために働けば、それを受け取る権利を得たのですから、それもやはり贈り物ではありません。贈り物は「完全に」ただなのです。それとちょうど同じことが、救いについても言えます。

いったい、放蕩息子は父親にいくらか支払ったのでしょうか。放蕩息子がいくら支払ったか言えるとしたら、私もあなたに「救い」を受けるのにいくら支払えばよいか言いましょう。放蕩息子は破産していたのでまったく支払えなかったのです。私たちも同じです。救いは価なしに、代価なしに受け取ることができるのです。救いを買うことはできません。神である主のみことばが、はっきり私たちに告げています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ　2・8～9）

「行ないによるのではありません」と明言されています。どんな行ないも手柄も、私たちのできることは何も救いには役立ちません。ただ、主イエス様だけが救ってくださるのです。

もし、私たちが主イエス様のところへ行って、主が十字架の上で完成された働きに自分自身を任せ、主イエス様に頼るならば、その瞬間に救われます。主イエス様は救うことのできるただ一人のお方です。

④戒め

もう一つの誤った見解は「戒め」です。多くの人々は聖書の中の神の戒めを守っていれば救われると信

じています。しかし、主イエス様は、戒めを守っている者はひとりもいないと言われました。私たちは自分自身を振り返ってみると、戒めを守れない者であることがよく分かります。しばしば、生活において戒めを破っていることを認めないわけにはいかないでしょう。

聖書は次のように言っています。

律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。

（ヤコブ　2・10）

一点でも戒めが破られるなら、すべての戒めを犯したことになる、と書いてあります。人間はみな、例外なく罪人なのです。なぜなら主である神の律法を犯したのですから、私たちには罪があるのです。そんな私たちに、今、何ができるというのでしょうか。

主イエス様が人類の身代わりとなり、罪滅ぼしのために死なれたのです。主イエス様は十字架にかかって私たちの罪をご自分の身に負われたのです。主イエス様は私たちの罪を贖うために、ご自身を犠牲として捧げられたのです。私たち人間がしなければならないことは簡単です。自分の救い主として主イエス様を受け入れることです。救われるというのは私たちにとって何と簡単なことでしょうか。だれでも、自分がどこにいようと、どんな状態であろうと主イエス様を受け入れることができます。わずか三分で救われるのです。

たとえば、入院中の癌患者のところへ行って「健康の法則」というような本を渡すのは、まったく愚かなことでしょう。その患者は癌なのです。彼が必要なものは病気の治療なのです。これと同様に、救われたいと思っているだれかに向かって、「あなたは律法を守るべきだ」というのは無意味です。人間は罪という癌をもっています。人間は自分の罪の病を背負ってくれ、健康を与えてくれるだれかを必要としているのです。ここに、「福音」がもたらされました。

主イエス様は、私たちの罪をご自分の身に背負われました。主イエス様はすべての「罪」をご自身の体で受け、十字架に運んで行かれました。そして、いま、ご自身のいのち、永遠のいのちを人類に与えてくださるのです。

しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもいないからです。

（ガラテヤ　2・16）

私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。

（ガラテヤ　2・21）

⑤典礼

最後の誤った見解は「典礼」です。多くの人々は教会で洗礼を受けたり、聖餐式を守ったりすることによって救われると信じています。しかし、主イエス様とともに十字架につけられた強盗は洗礼を受けていたでしょうか。聖餐式にあずかっていたでしょうか。いいえ、そうではありません。それにもかかわらず、この強盗は救われたのです。

十字架の上で主イエス様は「あなたはきょう、わた

しとともにパラダイスにいます」（ルカ　23・43）と言われたのです。ひとりの人が洗礼なしに救われたのですから、すべての人が洗礼を受けなくても救われるわけです。

このように、洗礼、つまり水のバプテスマは救われるための方法ではありません。主イエス様によって罪の赦しを受けた人は、もう救われているのであって、救われるために洗礼を受けるのではありません。

それと同様に、もうすでに救われているから聖餐式にあずかるのであって、救われるために聖餐式にあずかるのではありません。恵みによって救われた者が、主の聖餐式にあずかるのです。教会で行なわれるこのような典礼は、別の意味で大切なものですが、これらが人を救うことはできません。人は主イエス様によってのみ救われるのです。ただひとりの救い主は主イエス様ご自身です。



Ⅲただひとりの救い主

ここまで人間による救いの道として、宗教、道徳、行ない、戒め、典礼について考えてきました。私たちはそういったものに頼ることは誤った道であることを見たのです。最後に、神である主の計画された救いの道について考えましょう。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（ヨハネ　14・6）

この「わたしが」とは主イエス様であり、他のだれでもありません。宗教でも道徳でもなければ、また善い行ないでもないのです。神の御子である主イエス様のみが私たちの救い主です。主イエス様は「道」そのものです。道を教える「道標」ではありません。だれでも主イエス様を通らなければ、父なるまことの神の御許に行くことはできないのです。モーセによっても、釈迦によっても、またマホメットや孔子によっても行けません。僧侶や牧師、またローマ法王によっても、行くことはできません。ただ、主イエス様によってのみ、生きておられるまことの神の御許に行くことが可能なのです。みなさん、主イエス様にご自分の救いの道となっていただきませんか。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。（使徒　4・12）

これは何という驚きのみことばでしょう。聖書の中で、これほどはっきりしたことばは他にありませ

ん。イエス・キリストの他に救いはないのです。私たちが救われるべき他の名前はないのです。「その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」（マタイ　1・21）とあります。私たちは、他のすべての道から向きを変え、主イエス様だけに頼りましょう。主イエス様だけが、人間を救うことがおできになるからです。

主イエス様が本当にあなたを救ってくださるかどうか、心配ですか。聖書をみましょう。

わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。　（ヨハネ　6・37）

主イエス様はそう約束しておられます。主イエス様は決して拒まれません。主イエス様は、へりくだって御許に来る者を必ず受け入れられます。このような救い主を賜ったことを神様に感謝しようではありませんか。

神である主が人の救いのためにすべてをなしとげてくださったのなら、もう自分は何もしなくてよいではないか、と考えておられる方がいるかもしれません。何という勘違いでしょうか。人間は主が与えてくださるものを受け取らなければならない、ということをご存じないのでしょうか。聖書は言っています。「選び、そして受け取りなさい」と。救いは主イエス様によって完成されました。しかし、人間はそれを受け取らなければなりません。

たとえば、私はあなたに一杯の水を差しだすことができます。しかし、あなたはそれを受け取らなければ、のどを潤すことはできません。医者はあなたに薬を与えることはできますが、あなたがそれを飲まなければ何の役にも立ちません。救われたいと思うならば、主イエス様を心の中に迎え入れなければならないのです。「主イエスを受け入れなさい」と聖書は言っています。

この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。　（ヨハネ　1・12）

主イエス様を受け入れた人だけが救われるのです。自分の意思を働かせずに救われた人はだれもいません。私たちは自分の意思の決定なしには、どんな小さなことも受け入れられません。同様に私たちは自分自身の意思とは無関係に救われることはできないのです。自分で選ばなければならないのです。ですから、主イエス様を自分の救い主として受け入れてください。きょう、いま、受け入れなさい。これこそが聖書の呼びかけです。

「頭の信仰」と「心の信仰」の間には大きな違いがあることを考えるべきです。

人はエレベーターが自分の体を上へ運んでくれるものと信じています。しかし、その信じていることを実行に移さなければ、すなわちエレベーターの中に入らなければ、上へは行けないでしょう。

また、電車が自分の目的地まで運んでくれると知っていても、思っているだけで、電車に乗らなければ目的地には到着できません。同様に、主イエス様は自分を救うことができると思っていても、その信仰を実行に移さなければ、すなわち、主イエス様に頼らなければ救われません。

たとえだれであっても、主イエス様を選び、受け入れ、身を任せ、自分自身を捧げなければなりません。この信仰が人を救うのです。なぜ、きょう、今、主イエス様に頼ろうとしないのでしょうか。それはまさに、今でなければなりません。

自分がまだ救われていないことを知っているなら、先に延ばしてはなりません。「神は言われます。『わたし

は、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」（2コリント6・2）主なる神の時は今です。今が決定の時です。もっとも大切な時は来ています。あなたが決定する絶好の時です。明日では遅すぎるかもしれません。

決してためらわないでください。主イエス様を受け入れましょう。主イエス様を今、受け入れてください。その瞬間に永遠のいのちがあなたのものとなるのです。その瞬間に、あなたは救われるのです。悪魔に機会を与えないでください。悪魔が再びあなたをためらわせるなら、あなたは永遠に失われるかもしれないのです。ですから、来なさい。そして、主イエス様を今、受け入れなさい。

主を求めよ。お会いできる間に。（イザヤ　55・6）

主イエス様をもはや見出すことのできない時が来ます。ですから、主イエス様を受け入れてください。今、受け入れてください。



ただひとりの救い主、イエス・キリスト



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

（8回連載、第2回）

第二章　何のために生きるのか

人は何のために生き、また何のためにこの世に存在するのでしょうか？人生の意味とは何なのでしょうか？

私がエッセンという町にいた時、ある友人の実業家から取り乱した電話がかかってきました。「すぐ来てください」。私が急いで駆けつけると、彼は「息子が銃で自殺した」と言いました。私はその息子さんを知っていました。当時、彼は学生で、欲しいものは全て持っていました。若く、健康で、美しく、豊かで、高級車も持っていたのです。しかしこの若者は銃で自らを撃ちました。彼が残した手紙には次のように書かれていました。「私は、これ以上何のために生き続けるべきか、その意義が見出せないので、これで終わりにします。私の人生には意味がありません」

人生が持つ意味は想像を超えて深く、大切なものです！人生はたった一度しかないのですから、それはとてつもなく大きな問題です。たった一度しかない自分の人生。あなたはその意味について考えたことがおありでしょうか？

私は学生時代、数学が苦手でした。先生は私の答えを全く評価してくれず、提出した私のノートは赤字で一面に訂正して返されてきました。この面白くもないノートにはまだ使えるページがいっぱい残っていましたが、捨ててしまいました。そして新しいノートを買いました。そうすれば新しくやり直すことができるからです。これと同じように、私たちの人生もやり直しがきけばいいのに、と思いませんか？

多くの人々は死ぬ時、「全く最初からやり直すことができれば、私はそうしたい。全てを違ったふうにやり直したい」と思うかも知れません。

学習ノートは買い換えることができ、やり直すことができますが、人生はそうはいきません。私たち

の人生は一度しかありません。私たちが一度きりの生き方を間違えることがあれば、それはどんなにか恐ろしいことでしょう。その人生を台無しにすると、それは永遠にわたって台無しになるのです。この問題は深刻に受け止めるべきではないでしょうか。

今朝、私が泊まっているホテルのわきを、牝牛の群れが通りかかりました。その時、私は講演会のことを考えていたので、この牛たちが何のためにこの地上に存在しているのかを深く考えもしないで、何と幸せな生き物たちだろうと思いました。しかし、飼われている牛たちにとって生きること、つまり飼われている目的とは、人間に牛乳や食肉を提供することにほかなりません。また動物は、生きる意味について熟慮する能力がありません。ここに動物と人間の違いがあります。にもかかわらず多くの人は、一体自分は何のために生きているのかを自問することなく、生き、そして死んでいくのです。それでは



動物といくらも違わないではありませんか。人を真に人間たらしめるのは、「自分が何のために存在し、何のために人間であるのか、何のために生きるのか」を自問することにあるのではないでしょうか。

表面的で、あさはかな答え

「人は何のために生きるのか」という質問に対して、この世にはいろいろな「表面的であさはかな答え」があります。私はそのような答えに出会った一つの体験を持っています。ヒットラー独裁時代の一九三六年、ミュンスターという町の学生たちから、「私の人生の意味」というテーマで話して欲しいという依頼がありました。行ってみると、彼らは私の講演を聞きたかったのではなく、このテーマについて私と議論を交わしたかったようでした。そこで私は早速彼らに尋ねました。「私たちの人生の意味は何でしょうか。私たちは何のために生きるのでしょうか」

当時の若者は皆、ヒットラーのドイツ国粋主義に心酔していましたから、私の質問に対してすぐ一人の若者が立ち上がって言いました。「私は、国家と国民全体のために存在するのです。この関係は樹木とその葉みたいなもので、木の葉一枚一枚はあまり意味がないが、葉が集まった樹が存在の意味を持つのと同じです」。それに対して私はこう尋ねました。「そうですか。ではその樹は何のために存在するのですか。つまり、何のために国民は存在するのですか」。彼は答えることができませんでした。つまり彼の答えは、私の質問に対して「表面的で、あさはかな答え」でしかなく、本質的な答えになっていなかったのです。若者の答えは、問題の回答を少しだけ先に延ばしたに過ぎません。そこで私は彼らに言いました。「ある質問に対して先送りするような答えをしてはいけないのです」

私は、改めて彼らに質問し直しました。「それでは、人生の意味は何でしょうか。私たちは何のために生きているのでしょうか」。するともう一人の青年が立ってこう説明を始めました。「与えられた義務を果たすために私はこの地上にいるのだと思います」。私は言いました。「その通り。ではその私の義務とはいったい何ですか？私自身のことを言わせてもらうなら、私の義務はあなた方に神様の言葉を伝えることにあると思っています。さて、あなたの義務とは何なのでしょうか？」

ここで、私がかつて出会ったことのあるお役人の話をしましょう。その人は次のように言いました。「ここだけの話ですが、私は毎日書類にサインばかりしています。でも、この書類が全て焼失してもこの世は何事も無く続いていくでしょう。私はこんな無意味な仕事を毎日していることに悩んでいます」。ところで、義務とは一体何でしょうか。ヒットラーの第三帝国で、ゲシュタポは何百万という人間を殺害しました。そして、彼らが裁判にかけられたときの主張は、「我々はただ単に与えられた義務を果たしただけだ。私は命令に従ったに過ぎない」というものでした。

たとえ強制されたにせよ、大量殺人を犯すことが「人間の義務」だなどと、どうして言えるでしょうか。私には到底そんなことは言えません。

そこで私は学生に言いました。「これこそが問題の本質です。そもそも、私の義務とは何でしょうか。誰かそれについて答えられる人はいますか？いませんか？どうやら問題はまた元の出発点に戻りましたね」

青年たちは真剣に考えていました。やがて別の一人が立ち上がって、自信に満ちて話し始めました。「私は貴族の出身です。その血統は十六代前にまでさかのぼることができます。この貴族の血統を継承することが私の人生の目的だと言っていいのではないでしょうか」。そこで私は答えました。「過去十六世代にわたって何のために生きてきたのかわからないままで、十七世代目を付け加えても、そこにどういう意味があるのでしょう」

おわかりになっていただけるでしょうか。このように「人生の意味とは何か」という質問に対して、実にたくさんの「表面的で、あさはかな答え」が返ってきます。新聞の死亡通知欄には、よく次のように書かれています。「彼は仕事のためだけに生きた。自分のことなど考えず、家族のために努力した。それが彼の生きる目的、最大の義務であった」。こういう記事を目にするたびに、私は悲しみを覚えます。これではまるで馬と同じではないかと思うのです。馬はただ働くしかありません。しかし人間は、あくせく働くためだけに生きている存在であっていいのでしょうか。もしそうだとしたら、実に嘆かわしいことです。懸命に働くことだけが人生の意味だと考えるなら、冒頭でお話した若者のように、生きることに虚しくなって自ら生命を絶っても不思議ではありません。働くことは私たちの人生の目的ではないのです。

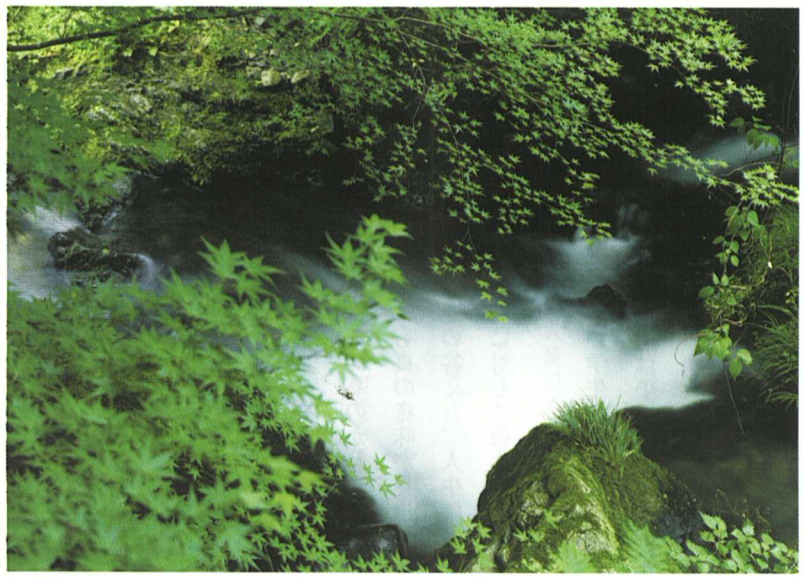
別の学生が語り始めました。「私は医者になろうと思います。患者の生命を救うことができれば、それこそすばらしい人生の目標ではないでしょうか」。そこで私は答えました。「そうですね。だけど、その患者自身が何のために生きているのかわからなければ、人の生命を救うことにも真の意味が見出せないのではないでしょうか。その答えも、人生にどんな意味があるのかという質問に対して根本的な答えにはなっていません」

その場には他にも大勢の若い学生がいましたが、私は、彼らが教養を身につけてはいても、基本的に何のためにこの世に存在するのかわからないで生きている、ということに驚きました。

多くの場合、このような議論を続けていくと、最

後には次のような答えにたどり着くことになります。「人生には深い意味などない。私が生まれたのは全く偶然であり、その背後には何の意味もない。だから私たちが唯一できることは、最大限に人生を楽しむことだ」。言い換えると、「私の人生に意味はない。両親が結婚しなければ、私が生まれることもなかった。偶然で私は存在している。だから私の人生は基本的に無意味だ」。このような虚無感を持つ人は、人生において辛く苦しいことに遭遇すると、容易に自殺願望に捕らわれやすいのです。「なぜ、この辛い人生を続ける必要があるのか。すべてが偶然であり、無意味であるなら、自分から終わりにしてもいいのではないか」

皆さんはご存知でしょうか。西独における自殺者数は交通事故の死者よりも多いのです。そして、自殺者の半数は三十歳以下の若者です。この数字が現代の恐ろしさを表わしています。多くの現代人は生



きることに何の意味も見出せないでいるのです。

私と話した大勢の人々は次のように訴えます。「人生は無意味です。だから私は刹那的享楽に身を任せるか、または自殺の誘惑に負けて、わが身を投げ捨てるかしかありません」。そこで私は彼らに聞き返しました。「あなたは今まで人生が全く無意味であるかのように生きてきましたが、もしあなたの人生にはっきりとした意味があるとしたら、あなたはどうしますか?あなたの人生の結末はどうなると思いますか?」

聖書には次のようなみことばがあります。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている……。（ヘブル　9・27）

この聖書の真理を無視して、人は自分の人生の真の目的を知ることなどできないのではないでしょうか。私たちは人生の真の意味を知らずして、死後に神のさばきを受けてもいいのでしょうか。「人は何のために生きるのか」。この質問の答えは核心に近づいて来たようです。では更に次に進みましょう。次のテーマは以下に記したものです。

誰がこの質問に対して答えられるのか

「人は何のために生きるのか」という質問に対して答えられるのは一体誰でしょうか。牧師でしょうか?大学の教授、それとも哲学者でしょうか?いいえ、彼らにはこの質問に対して答えを出すことはできません。私たちが何のために生きているのか、それについて明快な回答を出せるのは、ただ一人のお方しかありません。そのお方は私たちを創造し、私たちにいのちを与えられた神です。

誰かが何かを作り出そうと作業している時、その人自身が説明してくれなければ、その作業中のものが何なのか、また何のためのものなのかわからないでしょう？それと同じように私たちの人生も、私たちを創造した方だけが、何のために私たちを創造したかを説明できるのです。つまり、「私たちは何のために生きているのか」という質問は、創造主なる神の啓示を通してでなければ答えを得ることができません。その答えは、まことの神だけが与えてくださるのです。

「私たちは何のために生きているのか」。この質問の答えを求めて、多くの人々が聖書にたどり着きました。私もそのひとりです。実際、この「呪われた世界」になぜ自分が置かれているのかを知らなければ、決して耐えることはできないでしょう。あなたにとって、この「呪われた世界」という言葉は厳し過ぎますか？この言葉は聖書に出てくる言葉です。現代の世界は大変な呪いの下に置かれているのです。

そしてその中に生き続けることは、神の啓示を通して答えが与えられなければ耐え難いものです。まことの神は「生きる意味」について、聖書の中で私たちに答えておられます。ですから聖書は私たちにとって重要な意味を持っています。聖書など読まないという人がいますが、そういう人は「何のために生きるのか」という質問について真剣に考えたことがないのではないでしょうか。残念なことに、このような風潮は世界中に広まっています。ここで、聖書の答えを簡単な言葉にまとめると次のようになります。「神は、私たちを神の子どもとするために創造された」

父親はだれでも「自分自身の姿」を息子の中に見出したいと思うものです。神も人間を「神ご自身の御姿」に似るものとして創造されました。神が私たちに望んでおられるのは、「私たちが神の子どもになり、いつも神に語りかけ、また神も私たちに語りかけることができるようになる」ことです。神は私たちを限りなく愛しておられますが、私たちもまた神を愛することを望んでおられるのです。

あなたは神に祈っていますか？父親にとって、子どもが長年にわたって話をしてくれないほど辛いことはありません。つまり、祈りをしない人間は天の父なる神と全く話をしないのと同じ状態なのです。神は、私たちが神の愛する子どもとして神に話しかけ、神を愛することを望んでおられます。そのために私たちはこの世に置かれているのです。

私はキリスト教やその他の宗教の教義について話しているのではありません。私たちを創造された神、今も生きて働いておられる神について話しているのです。その方があなたを神の子どもとなるように創造されたのです。あなたは、いますでに神の子どもになっていますか？

さらに一歩前進しましょう。私たちは神の子どもとなるべき存在ですが、生まれながらに、そのままで神の子どもと言える状態にあるとは言えません。聖書の創世記には、「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。」（創世記　1・27）とあります。しかし人は、その直後に大きな過ちを犯してしまいました。神は、人を神に似たものに造られると同時に、自由意志を持つものとして創造されました。そして人はその自由意志によるあさはかな決断、神に反する決断をしてしまいました。初めに神によって造られたアダムとエバは、神によって禁じられていた木の実を食べました。この行為が意味するのは、「私は自分自身を支配する。私は神なしに生きていける」ということです。アダムは神の存在を疑ったわけではありませんが、自分自身を神から切り離して「自分の人生は自分で決める」という態度を取ったのです。

最近、或る人が私にこう言いました。「ブッシュさん、あなたはいつも神様の話をしておられますね。でも、私にはどうしても神様を見つけることができ

ないのです。どうすれば神様を見つけられるでしょう?」そこで私は次のように答えました。「何万年もの昔にタイムスリップすることを想像してみてください。タイムマシンに乗って、人類が創造された最初の時代を旅していると考えてみてください。私は美しい楽園の庭を散歩していました。そこで、茂みに隠れている最初の人間アダムに出会ったのです。『今晩は、アダム』と私。『今晩は、ブッシュさん』とアダム。私が考え悩んでいる様子を見て、アダムは『何をそんなに考え込んでいるのですか』と聞いてくれたのです。私は言いました。『私は多くの人々から"どうすれば神様を見つけられるのか"と聞かれるので、どう答えればいいのか考えていたのです』。アダムは笑って、『どうすれば神様が見つかるかなんて、簡単なことじゃないですか。神様はそこに存在しているのですから。むしろ、みんなが本当に知りたいのは"どうすれば神様から逃げることができるか"じゃないですか?それこそが難しいのです』と言いました」

アダムが皮肉を込めて言ったことは真実です。神は確かに存在します。その気になれば人は簡単に神を見つけることができます。でも、人は神から逃れることができないのです。過去三百年の精神史を見てごらんなさい。多くの人々が神から逃れられると考えて戦ってきました。しかし、神から逃れることは人間には不可能なのです。皆さんも心の底では、神は存在するかもしれない、と思っておられるのではないでしょうか。しかし、あなたは神の存在を認めようとせず、したがって神に属していないだけではないでしょうか。多くの人々は、神についての真に重要な質問をなおざりにしているのです。神の存在を否定はしないが、神に属することもしない。神の敵ではないが友でもない。そのようにして人生最大の問題を未解決のまま放置しているのではないでしょうか。

あるスイスの精神科医は自分の著書の中で「生きていくための重要な問題を解決しないままでいると、人は精神的な傷、つまり心のトラウマを持つことになる」と書いています。現代の人間は神に関しては病んでいるのです。多くの人間は神を否定はしないが、神に属することもしないのです。結局は神に属したくないのです。

現代人は神に興味を失ってしまっているとあらゆる所で言われています。実は私もその現代人のひとりですが、私はそうは思わず、神に深い関心を抱いています。そして皆さまにも、この神の問題に対して解決を得ることを真剣に考えていただきたい、と心から願っているのです。

「私たちの使命は、神の子どもとなる」ことです。そのことに関心を持たない限り、人としての使命を果たしていないことになります。人は生ける神の子どもとなって初めて、本当の人間になるのです。



最も大切な質問に対する神の答え

繰り返しますが、私たちは生まれながらに神の子どもなのではありません。私たちは「いつかは神の子どもになるために、この世におかれている」のです。そこで、私たちの人生に神の子どもとなるための「何か」、つまりきっかけになる出来事が起こらなければなりません。

私たちは最初から神の子どもではないのですから、神を愛することもなく、神の訓戒を守ることもなく、神のことを考えることもなく、神に祈ることもしません。ですから次に大切な質問は、「どうすれば、生きておられる神の子どもになれるのでしょうか」です。

ここで、できることなら読者の方々に紙と鉛筆を配って、「どうすれば神の子どもになれると思いますか?」の答えを書いていただきたいところです。或る人はこう答えるでしょう。「私が良い行ないをすることによって」。また他の人は「神様を信じることによって」と書くでしょう。でも、このような答えでは十分ではありません。最大のポイントは「どうすれば神の子どもになれるか」ということです。全ての質問の中で最も大切なこの質問に対しての答えは、神ご自身が答えてくださらなければ私たちにはわかりません。神がいかにして私たちを子どもとして受け入れてくださるのか。それは神ご自身が解き明かしてくださらなければ私たちにはわかりません。ですから聖書には、神による明らかな答えが提供されているのです。その答えとは、「イエス様を通してのみ神の子どもになる道が得られる」というものです。聖書の言葉は要約すると次の通りです。

「イエス様は、神の国からこの世に来られた」

これを聞いたあなたは、「神の国って、恐らく私より高い所にあるのだろう」と思われるかもしれません。ですが実際には、神は高いところからだけでなく、「ありとあらゆる方向からあなたを包んでくださる」のです。私たちは、高さ、幅、奥行きからなる三次元の世界に生きていますが、それ以外にも次元は存在し、神のおられる次元は全く異なった次元です。言い換えると、神は目には見えないが、あなたの近く、手の届くすぐそばにおられるのです。また神はいつもあなたとともに歩んでいてくださるのです。そして、あなたが神を知らないままに人生を歩む様子を見て、心を痛めておられるのです。しかし私たちの力では神がおられる次元への壁をぶち破ることも、神がおられる次元への扉を開けることもできません。それができるのは神だけです。ですから神ご自身が壁を破り、イエス様の姿をとって私たちの所へ来てくださったのです。

聖書にはこう書いてあります。

この方(イエス様)はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。　(ヨハネ　1・11)

イエス様はこの地上、本来イエス様のものであるべきご自身の国に来られたのに、人間は扉を閉ざして受け入れようとはしなかったのです。父なる神はそれを見て、人間に対する関心を捨ててしまわれたでしょうか。いいえ。聖書の言葉は次のように続いています。

しかし、この方(イエス様)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。　(ヨハネ　1・12)

イエス様を信じ受け入れた者は神の子どもとされるのです。これこそ真に驚くべきことではないでしょうか。あなたは自分の人生の扉をイエス様のために開いてみようとは思いませんか?

第一次世界大戦の頃、私は若い将校でした。神から遠く離れている者でした。しかしイエス様を人生に受け入れて私の人生は一変しました。私はイエス様を信じたために投獄されたこともあり、多くの困難な道を歩みました。けれども、私は一度も後悔したことはなく、聖書のみことばに支えられて生きて来ました。私は「神の子どもとされた」ことによって、私の人生に真の意味を見出すことができました。勿論あなたも、どのような職業に就いていようとも、牧師であろうと、経営者であろうと、会社員であろうと、主婦であろうと、教師であろうと、神の子どもとされるなら、その瞬間に例外なく確実に人生の真の意義を見出すことができます。ともかく、まずイエス様を受け入れることです。そうすれば、神はあなたが確実に人生の真の意味を見つけるようにしてくださいます。

その一つの実例を新約聖書から見てみましょう。

その人はマグダラのマリヤです。彼女の人生は荒廃したひどいものでした。彼女は七つの悪霊にとりつかれていました。彼女は本能的な欲望と情熱に苦しめられ、疲れ果てていました。そのような彼女の人生に突然イエス様が入って来られたのです。神の御子であり救い主であるお方が、彼女に入っていた悪霊を追い出されたのです。イエス様にはそうすることが可能であり、また実際にそうしてくださったのです。その瞬間からこの女性は主イエス様のものとなり、彼女の人生はもはや虚しいものではなくなったのです。

彼女はその後、イエス様が十字架につけられ、殺される現場に立ち会う体験をします。その時、彼女は悲しみに打ちひしがれ、かつての虚しい罪の中に戻されてしまうのではないかと怖れたことでしょう。

しかし、イエス様が十字架につけられてから三日目の朝早く、彼女はまだ暗いうちにイエス様の墓に来ました。彼女が墓に来た時、墓から石がとり除けてあり、中はからっぽでした。マリヤは驚いてお弟子たちにこのことを告げ知らせた後、また墓に戻り泣いていました。この女性の気持ちは痛いほどよくわかります。もし、私が今日イエス様を失うことがあったとしたら、きっと悲しみと虚しさのどん底に突き落とされることでしょう。彼女は自分の救い主がいなくなり、自分がどのようにして生きていけばいいのかわからなくなったに違いありません。突然その時、後ろから聴きなれた声が聞こえました。「マリヤ」。彼女が振り返ると、そこによみがえられたイエス様がおられました。喜びの涙が彼女の頬を伝わり、絶望から回復された彼女はこう言いました。

「ラボニ（わが主よ）」

マリヤの例から明らかなことは、人生の意味に対して答えを与えることができるのは哲学などではないということです。マリヤは罪深い自分の人生の中で生きる意味を見失っていました。しかしイエス様を受け入れた瞬間、この問題は解決されました。「神の子ども」とされ、彼女の人生は意味のあるものとなりました。イエス様の十字架の死により、一旦はまた人生の意味を見失いかけました。けれどもイエス様のよみがえりを体験することによって、再び、更に深く大きな生き甲斐のある人生の光の中に置かれたのです。よみがえられたイエス様は、今日も生きて天の神の右の座におられ、いつも私たちに温かい眼差しを注がれ、手を差し伸べていてくださるのです。私たちの信じるイエス様は、今も生きて働いておられる永遠の主です。

ですから、私は皆様に「ぜひ、イエス様を受け入れてください」とお願いしたいのです。イエス様はあなたを待っておられます。今日、家に帰られたらぜひ、イエス様と話してみてください。イエス様はあなたのすぐそばにおられます。そしてイエス様に次のように呼びかけることができれば何とすばらし

いことでしょう。「主イエス様、私の人生は虚しく無意味です。どうかマグダラのマリヤのように、私の所にも来てください」

私たちがイエス様を受け入れると人生に大きな変化が起こります。私たちが罪を告白し、イエス様を信じ受け入れたその時、私たちはイエス様の十字架のみわざによって救われ、罪を赦され、新しいいのちの中に移されます。私たちの罪に汚れた古いからだは、その時、イエス様の十字架の死にあずかって一旦死にますが、すぐにイエス様がよみがえられたように「神の子ども」として新しく生まれ、そこから新たな、意義のある人生を歩むようになります。私たちは聖書にある約束の通り、一人ひとり例外なく神様から「聖霊」をいただきます。勿論、あなたもそのことを確実に体験することができます。

まずはともかく、イエス様を受け入れてください。イエス様を受け入れるとあなたは新しい存在になるのです。「神の子ども」になるということは、思考の変化を意味するのではなく、全く新しい存在となることを意味します。

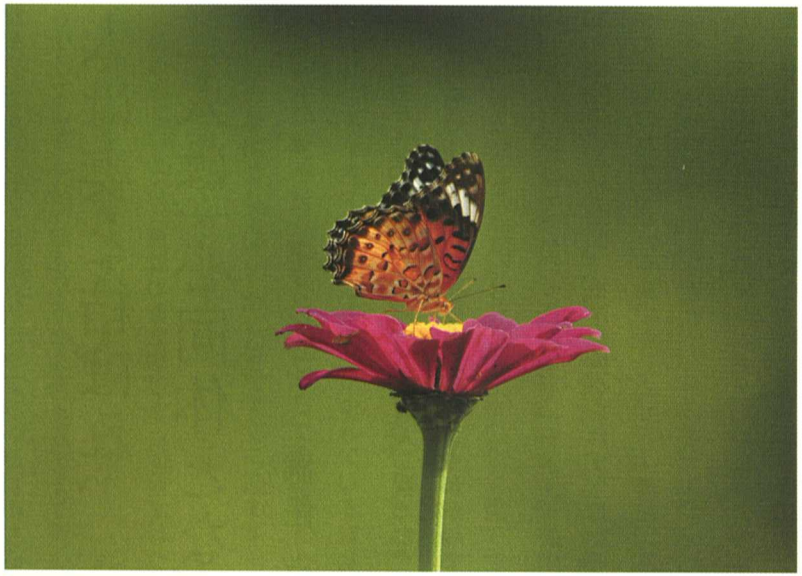
私は、この本を読んでおられるあなたに、「古い自分の罪に死に、神の子どもとなって生まれ変わり、まことのいのちに生き、神をほめたたえる、というすばらしい体験」をご自分のものにしてくださるよう心から願っています。それこそが、あなたがこの世に「何のために存在しているのかを知る」唯一の方法です。どうか今、イエス様を信じ受け入れて、真の生きがいのある人生を始めてください。そしてそのことを通して、天の父なる神がご栄光を現わしてくださいますようにと祈っています。

私がこの本で語ったことは、一人の牧師の考えや宗教上の教義などではありません。「あなたの人生と死」に関わることです。「永遠に生きるか死ぬか」の問題なのです。主イエス様は言われました。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。（黙示　3・20）

このように、主イエス様は私たちに呼びかけておられます。「あなたの人生の戸のすぐ外にわたしは立って待っています。すぐ開けてください。わたしはあなたの人生に意味を与えたいのです」

私たちの人生は一度しかありません。何のために生きるのかということは最も大切な質問です。神は、十字架につけられてよみがえられたイエス様の中に明確な答えを示しておられます。今、この瞬間もイエス様はあなたの人生の戸の外に立って叩いておられるのです。ぜひ、その扉を開けてください。決して後悔することはありません。





ご家族といっしょに

人は妻と結ばれ、二人は一心同体となる

御任（みとう） 克彦

私は日本で生まれ日本で育った韓国人二世です。韓国語は話せず、韓国の歴史や地理もよくわからない、という微妙な立場にいます。

私の韓国姓は、“任”といいます。私が二十歳のときに帰化しましたが、祖国韓国を忘れず先祖をいつまでも敬おう、という願いを込めて、「御任（みとう）」という姓になりました。

御任の家族は両親と男兄弟六人、末に女一人の九人です。私たち兄弟は親を大切にし、また兄弟仲もよく、親戚のものがみな羨むほどでした。父は母子家庭で育ち、天然痘にかかり、小さいころからいろいろと差別を受け、ずいぶん苦労したようです。母は日本で育ちましたが、「朝鮮」、「朝鮮」と石を投げつけられたり、辛い思いをたくさんしてきたようです。そんな二人でしたが、明るく、しかししたたかに温かい家庭を築いていました。そんな両親の唯一無二の楽しみは自慢の七人の子の成長で、将来は子供たちとのバラ色の人生を夢見て、仕事、仕事に明け暮れる毎日でした。長男である私は弟たちの手本になるべく、意識・無意識のうちに模範生として振舞ってきました。常に「いい子」、「いい子」でした。

家族は私が五歳のときに一度、韓国に引き上げました。しかし、韓国は住みにくく、一年でやはり日本に戻ることになりました。正規のルートでは戻ることはできず、密入国をすることになりました。母と子だけ先にということで、母は六歳、四歳、二歳と生まれたばかりの乳飲み子の四人を抱えての帰国でした。天井もない小さな漁船に三十～四十人がぎっしりと詰め込まれ、大きな荒波でもきたらそれこそアッという間にひっくり返り、全員命はないというような小船での帰国でした。何時間もかけ、夜に突然、ドーンという衝撃で博多の海岸に着きました。密入国ですからみんな大慌てで、蜘蛛の子を散らすように逃げました。母も四人の子を連れ、追い立てられるように下船しました。その日はクリスマス・イブで、浮かれている博多の街を夜、靴を履く暇もなくはだしで逃げました。命がけの帰国でした。しかし結局すぐに捕まり、半年間を収容所で過ごしました。

私の小さいころ、両親は養鶏場をやっていました。三千羽の鶏を飼っていましたが、その世話を二人だけでしていました。朝も早くから夜も遅くまで鶏の世話をする音を聞きながら、小学五年の私は小さな

弟をあやしながら寝かしつけます。両親にだけは苦労はさせない。一人前になったときにはきっと楽をさせる、と何度も心に思いました。長男の私は、弟たちよりも親の苦労をたくさん目のあたりにし、ますます親や家族を第一、と考えるようになりました。そんな私も年ごろになり、結婚の話題も出るようになりました。そんなときはいつも、両親さえ気に入ればいい、と思っていました。しかし、大学で佳子と知り合い、結婚を真剣に考えるようになり、日本人の佳子と両親への思いとで悩みました。両親は、相手が日本人であるという、ただこの一点で猛烈に反対し、半狂乱になりました。その反対たるや世間一般、並みの反対ではなく、別れなければ殺すぐらいの猛反対でした。弟たちも全員両親の側につき、私は家族のなかで一人孤立しました。なぜ自分は韓国人に生まれたのか、なぜ自分は日本人ではないのかと、自分の生い立ちと国籍を呪いました。

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

何度も死までも思いつめた私たち二人ですが、当時このみことばを知っておればどれほど励まされ、どれだけ大きな希望を抱いて歩めただろうか、と今にして思います。そんな猛反対の大合唱のなか、親、兄弟に対して後ろめたさを感じながら、二人で生活を始めました。お互いに純粋に愛し合い、また、愛し合う者二人が夫婦になる。そんな当たり前のことを、二人はひっそりと肩を寄せ合うようにして暮らし始めました。すさまじい反対の嵐ではありましたが、二人で生活できることは私には夢のような喜びで、それこそ、朝起きるといつもほっぺをつねって夢ではないかと確認する日々でした。

私は祈るとき、〝愛する妻〟といいます。私と知り合ったばかりに結婚式すら挙げることもできず、死をも覚悟して、なんの取り柄もない私についてきてくれたのです。そんな彼女を私は、愛する妻といわずにはおれないのです。

「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」この奥義は偉大です。（エペソ　5・31〜32）

結婚後、数年間は子どもに恵まれませんでしたが、やがて待望の第一子が誕生しました。とりあえず報告だけでもと思い、出産を告げました。母はどうして堕ろさなかったのかと怒り狂い、父は苦々しい顔をして睨みつけました。しかし、その子が三歳になったころ、御任の家への出入りが許されました。私たち二人は、とくに妻は極度の緊張のなかではありましたが、数ヵ月はとりあえず表面上平穏に過ぎました。

韓国では法事をことさら重要視するのですが、そのころすでに信仰をもっていた妻は写真に礼をすることができず、御任の家はまた大もめにもめました。親は、法事もできない嫁なんて、と激怒し、弟たちは妻を非難したり、土下座して礼をしてくれと頼みこんだりもしました。あろうことか信仰をもっていない私も妻をかばうどころか、「やっとここまできたのにすべてがぶち壊しになる。心のなかで〝イエス様〟といって、礼をしてくれ」と弟たちと一緒になって妻を責めました。次の日が法事という、前日のことです。真夜中にふと目が覚めると、妻が部屋の窓からさす月の光に照らされて座っていました。親の家で、親兄弟のみならず、味方になるべき夫までが責める、そんな四面楚歌の状況のなかで妻はイエス様に祈っていたのです。月明かりのなか、静かに一人祈る妻の姿に私ははっと目が覚め、妻の気持ちもわかってやれず、その場さえやり過ごせばと安易なことばかり考えていた自分の身勝手さに愕然と

しました。当時信仰や偶像礼拝のことはわかりませんでしたが、妻のイエスへの真摯で妥協のない姿勢に心を打たれた私は、「信仰のことでもう妻を責めることはしない。本当に悪いことをした、ほんとうに申し訳ない」と、心から悔い改めました。

たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。（1ペテロ　3・1〜2）

両親の怒りがさらにエスカレートし、いよいよ身の危険も感じ始める状況となり、親との争いを避けるため、私たち家族は身の回りの荷物を大急ぎでとりまとめ、夜逃げさながらに家を出ました。妻は三人目の子をみごもっていました。行き場所もなかったので、まるで糸にでもひかれるように軽井沢のキャンプ場に導かれました。親兄弟といつももめ、常に緊張状態にあった心は、集会の兄弟姉妹の笑顔、ベック兄の「克彦、よくきたね」という一言に、「ここにはきっとなにかある。本当の平安がある」と感じ、ほっと和みました。その後、行く所もなくゲストハウスで二週間滞在している間、小学一年の子を学校へ行かせることもできず・・・妻も八ヶ月の身重なのに、自分は仕事もしないでこんな所で無為に時間を・・・と、自分の無力さ、どうしようもない先行きに、ただただ絶望感に打ちひしがれてしまいました。そんなどん底で私は主を信じたのです。

イエスは怒って彼らを見回し、その心のかたくなのを嘆きながら、その人に、「手を伸ばしなさい。」と言われた。彼は手を伸ばした。するとその手が元どおりになった。（マルコ　3・5）

その後、親との争いを避けるため、私たちはアパートを転々とし、また仕事をすると居場所がわかるので一年間無職で過ごしました。この間、収入はなく、テレビやラジオや電話もなく、用があるときは電報がきて外へ電話をかけにいく、そんな毎日でした。しかし、みことばに励まされ、主にある兄弟との交わり、イエス様への祈り会などで、私の心はすごく満たされ平安そのものでした。

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。（2コリント　6・10）

私はそのときの一年を、もし天国がこの世にあるならこれこそ「この世の小さな天国」ではないか、と感じたほどです。そして一番幸せに感じたのは、夫婦がイエス様という同じ土台にあり、なにもなくても二人の間にはいつもイエス様がいる、ということでした。それは心強く、本当に嬉しいことでした。

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。（伝道者　4・12）

しかし、その後も本当にいろんなことがありました。弟たちも両親との確執のため全員が両親の許を離れ、居場所さえわからない状態になりました。両親が人生のすべてをかけ、ただひたすら育てた六人の息子たち、生き甲斐であり宝であった息子たち、その六人全員が両親から逃げていったのです。

異国の地で誰のために、なんのために七十年以上も頑張ってきたのか。両親は、自分たちがなにをしているのかわからない、盲目にされているとしかいいようがありません。

この（汚れた霊につかれた）人は墓場に住みついており、もはやだれも、鎖をもってしても、彼をつないでおくことができなかった。彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いて・・・夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた。（マルコ　5・3〜5）

まさに両親のことです。自分で自分の体を傷つけ、悲しみのあまりに泣き叫んでいます。身も心もぼろぼろになり、それこそ全身血だらけになっています。

神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。（ルカ　18・7）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

イエス様は、両親も必ず主の救いにあずかれると、はっきり約束してくださっています。真実で不可能なことはなにもないイエス様の約束の日、劇的なその日を、私はわくわくして待っています。

今、御任の家は冬の時代です。厳しい寒さのまっただなかです。しかし、もし私が信仰をもってなければ、この厳しい冬はきっと永遠に続くと思えたかもしれません。でも、冬の後には必ず春がくることを私はイエス様に教えていただきました。厳しい冬が長ければ長いほど、それだけいっそう春の喜びも大きいものです。その喜びの春を想像すると、この今の冬の時代も毎日毎日が希望の日々でもあります。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。（1ペテロ　1・6〜7）

私と妻は結婚を通し、数々の試練や試みや苦しみに出会いました。死をも考えるほどに辛いこともたくさんありました。でも、嬉しいことに苦しみを通してイエス様から祝福や喜びもいっぱいいただくことができました。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。（詩篇　23・4）

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。（詩篇　27・1）

私はもちろんのこと妻も欠点ある人間です。他の人の目には嫌な欠点、性質であったとしても、私にとっては、妻にとっては、そんな欠点も長所も含めすべてひっくるめて唯一無二の、この世でかけがえのない愛する妻であり、夫なのです。そんな二人を引き合わせてくださったイエス様に本当に心から感謝します。また、二人の間に素晴らしい素直な四人の子を預けてくださったことを感謝します。そして、真の神様、素敵なイエス様に出会えたことを心から感謝します。

一九四八年、大阪府生まれ
清水谷高校、東京歯科大学大学院、シドニー大学、
歯学博士、妻・佳子



ご家族といっしょに

主はすべてのことを成し遂げてくださいます

御任（みとう） 佳子

私は祖父から続く歯医者の娘として生まれました。歯科大学に入り、そこで克彦さんと知り合いました。卒業するころはお互いに結婚を決意するようになりました。主人は、自分は韓国人だからきっと結婚は大変だと思う、と言っていましたが、私には日本人と韓国人ということが結婚の障害になるとは思えませんでした。ところが主人の両親の反対は、日本人の血を自分たち家族のなかに入れることはできないという、話し合う余地のまったくない激しいものでした。私たちは、誰ひとりとして喜んでくださる人のない状況で結婚しました。

籍を入れた次の日、私ひとり主人の両親に呼ばれて、「日本人は大嫌いだ。今までずべてうまくいっていた。自分たちの家庭をめちゃくちゃにしたお前を殺したいほど、憎い。絶対うまくいかないから今すぐ離婚しろ。それができないのなら、日本人であること、また自分のことはすべて捨てて韓国人の嫁として親兄弟に仕え、すべてのことにおいて従え」と、ものすごい剣幕で責められました。私は生まれてこの方そんなに怖い思いをしたことがなく、ショックでした。やっとの思いで帰してもらいましたが、もう二度と主人の両親には会いたくない、嫁などとんでもないと思いました。

主人は、自分の両親のところへ行くようにとは言いませんでしたし、二人だけの生活はとても気楽でした。でも、私の心の底にはどうしても満たされない、虚しい思いが湧き上がるようになってきました。もしかして子どもが生まれたらこの虚しさから解放されるかも知れないと思いました。私は、結婚前から生理がまったくなくなってしまっていたので、不妊治療に通い続け、排卵誘発剤を使ってやっと長女が与えられました。主人は両親に長女誕生の報告をしましたが、これで離婚ができなくなったと母はのたうちまわって悔しがりました。そして私の心のな

かには、長女誕生の喜びにも関わらず相変わらず虚しい思いがありました。私は聖書が読みたくなって近くの教会に行き、初めてイエス様のことを知りました。天地万物を創造され、今も支配していらっしゃる本当の神様がいらっしゃったのだ、と新鮮な驚きと感動に包まれ、なににによっても満たされなかった虚しい心が初めて満たされたことを感じました。それから聖書を読むうちに、「祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。」(マタイ　5・23~24)というみことばに出会いました。それを読んだとき、すぐに主人の両親のことが思い浮かびました。私のことを殺したいほど憎んでいる、という言葉がずっと心に残っていたからです。イエス様は私に主人の両親のところへいって仲直りをしなさいとおっしゃっているのだろうか、と思いました。でも以前会ったときの恐ろしい思いが蘇ってきます。あそこへ行くということは、自分のことは全部捨てて嫁として仕えますからどうか許してください、と謝りにいくことです。あんなに憎まれているところで私は嫁としてやっていけるだろうか、今のこの気楽な生活を捨ててそんなところへ行けるだろうか。でも、もしイエス様が私に本当に「そうしなさい」と言うのなら、従うほかないのではないだろうか。私は確信がもてないまま悩みました。私は長女が生まれた後も排卵誘発剤を打たなければまったく生理がない体でした。信仰をもってからは病院通いをやめていたのでもう何か月も生理がまったくない状態でした。それで「イエス様、あなたが本当に主人の家に行きなさいと言われるのなら従います。でも、にぶい私に、あなたの御心がはっきりわかるため、そしてまた私の慰めのために子どもを与えてください」とこんな祈りをしました。そ

してまったく生理のないままに、ほどなく妊娠していることを知り驚きました。私はイエス様が祈りに答えてくださった驚きと喜び、そしてやはり主人の家に行かなくてはいけないのかという苦しい思いで、とても複雑な気持ちでした。でも、妊娠の期間中、そんな私にイエス様はみことばによって励ましてくださいました。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。
(マタイ　16・24)

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるため・です。
(マタイ20・28)

私はこれらのみことばに励まされて、主人の家に行きました。そして両親に手をついて謝り、「どうかこの家の片隅でいいから置いてください。どんなことでもしますから」とお願いしました。母はそのことは喜びましたが、「弟たちの手前、日本人の嫁は認められないから家に入れることはできない」ということでした。主人は私と両親の仲がうまくいくようになって喜びましたが、それからが本当の戦いの始まりでした。

韓国では先祖崇拝の思想から法事が盛んで、主人の家では年に三回行なっていました。法事のときは亡くなった人の写真の前で三回深く頭を下げるのですが、聖書には、偶像礼拝してはならない、と書かれてあるので私はそれができなかったのです。当然両親は烈火のごとく怒り、私は本当につらく悲しくどうしてよいかわかりませんでした。回を追うごとにその争いはますます激しくなり、私は誤解と憎し

みのなかでなす術を知らず、「ほかのことはなんでもしますからこのことだけは許してください」と泣いて謝るばかりでした。両親は、ほかのなにをしても無駄で、先祖崇拝が一番大事なんだ、と言います。心のなかで「イエス様」と言ってすればいいじゃないか、それですべて丸く収まる、いい嫁、いい妻になれる。周りの人だけではなく私もそう思いました。でも、私の心のなかの声が、どうしても私を引き止めるのです。

そんななかで私が一番苦しかったのは、主人が両親と私の間に立って苦しんでいることでした。最愛の人と結婚し、主人の喜びは私の喜びであり、主人の苦しみは私の苦しみでした。それなのに、私のせいで主人に苦しみを与えているということは耐えがたいことでした。私たちは喧嘩一つしたことがなかったのに、法事のことになると主人は怒鳴り、離婚や自殺のことも言うようになりました。信仰のない主人は、偶像礼拝などといってもわかるわけもなく、法事で礼をするかしないか、こんなにつまらないことで激しい争いになる親が親なら妻も妻、まったく理解できない絶望的な思いでした。私は主人のその辛い自暴自棄の心が痛いほどわかりましたが、でもそれに対してどうしてあげることもできなくて、それが死ぬほど辛かったのです。私は、「イエス様、信仰をもっている私が信仰ゆえに迫害に会うことはちっとも構いません。でも、信仰をもっていない主人があなたのゆえにこんなに辛い苦しい目に会うのは私には耐えられません。どうぞ、主人が立ち直れるように慰めを与えてください」と祈りました。

私は長男が生まれた後でもまったく生理がありませんでした。でも、それから少しして妊娠していることを知りました。それは、私たちのきれそうな絆をまたつなぎとめてくれました。その少し前の法事のとき、主人の家のなかは大乱闘になってしまって、

私ももう来るなと言われたのですが、教会に行くのをやめるということで、また出入りを許されました。母は私が教会に行くのをやめたことを、信仰をやめたと受け取って大喜びしました。そして私のことをやっぱり長男の嫁は違う、と特別扱いしてくれました。もちろん、信仰をやめた訳ではない私はそれがかえって辛く、今度の法事はどうなるのだろうと恐れの気持ちでいっぱいでした。一方、私が教会を出てから一か月ほどして、初めて吉祥寺集会が近所の吉田兄姉宅で開かれることになりました。教会ではないからと主人の許可をとり、私もそこに集うようになりました。集会は素晴らしいところでした。イエス様の臨在感と力にあふれていました。ベック兄との交わりも与えられ、今までのことを話し、今度の法事はどうしたらよいのでしょう、とお聞きすると一言、「妥協するところに神様は働かれないよ」と言われました。私は絶望的な思いでその言葉を聞きました。この次の法事で礼をしなかったら、もう信仰を捨てたと思っている両親がどんなに激しく怒るか、そして主人がどんなに苦しむか、もう耐えられないに違いない、私はただ一つの希望もなく真っ暗やみのなかでうめいていました。それでも私は今までにも増して必死になって祈るようになりました。家事や炊事のとき、トイレのなかでもなにをしていても、ただ祈り続けました。周りの姉妹方も熱い祈りを共にしてくれました。そんななかで次々といろいろなことが主から示されました。私は主人を心から愛していると思っていたのですが、それは、私が嫌われたくない、私のそばにいてほしい、というまったく自分のための愛でした。私は主人を自分のものとして握りしめていたのです。主は言われました。「私より大事なものがあってはいけません。それが、偶像礼拝です」。そして、イエス様は、ちっぽけな私の愛とは比較にならない大きい愛で主人を愛して

おられ、この苦しみを通して救いへと導こうとされている、ということがわかるようになりました。私は、「イエス様、私はいつまでも自分中心の人間です。でも、イエス様は永遠の愛で主人のことを愛し、御許に引き寄せようとしてくださっています。それを邪魔していた私をどうぞ赦してください。私は主人が救われるためでしたらどんなに誤解され憎まれても結構です。すべてをあなたに委ねます」と、そのように心から祈れるようになったときに私から恐れはまったく消え去りました。そして今度の法事を通して主人は救われるのでないか、という思いが与えられていきました。

法事の日の少し前、私は妊娠七か月でしたが出血が続くようになり、病院に行ったところ、切迫早産だからすぐ入院しないと母子ともに危険だ、と言われました。私が入院すればそのまま法事はなにごともなく過ぎてしまいますけど、これは主人の救いにつながらないと思い、入院を拒否して家に帰り祈りました。「イエス様、私は今度の法事を通して主人が救われる、という思いが強く与えられています。もしそれがあなたからのものでしたら三日後、病院に行ったとき入院しなくてもよいようにしてください。でも入院することが御心でしたらそれに従います」

三日間、夜になると痛みが襲ってきましたが、赤ちゃんを与えてくれたのも、私の体を造ったのもイエス様。イエス様がすべてを支配してくれているのだと思い、平安な祈りのうちに過ごし、三日後病院に行くと、絶対安静を条件に自宅にいることを許されました。私はそのことを通してますます今度の法事を通して主人が救われるのだ、という思いが強くなり、心から感謝の思いが湧き上がるようになってきました。家では近くの姉妹が食事の世話から子どもの世話までしてくれ、私はトイレに行くのにも這っていくようにし、絶対安静で寝ていました。そしていよいよ法事の日、家で私が安静にしていて法事に来ないとわかった主人の両親は激怒し、私たちの家に来て泊りこみ、法事で礼をするか離婚するか、二つに一つ、と朝から晩まで一日中脅かしたり乱暴したりしました。私は今まであんなに恐れていたのに心がまったく平安で、イエス様がすべてを支配してくださっているのだ、このことを通して主人が救われるのだ、と感謝の思いが自然に湧きあがってきました。目の前の現実はひどい状態なのに、それよりも、イエス様の臨在感のほうがもっと強く私の心を支配しているような、そんな不思議な気持ちでした。起きていつも以上に立ち働き、その合間は責められているのですが、恐怖も疲れも感じず、つい賛美が口から出そうになる感じでした。こんな状態が何日も続き、主人の両親は私がまったく動じないので疲れ果ててしまい、一日だけ家に帰りました。そしてその空白の一日に、この異常で恐ろしい事態をなんとか打開しなければ、と主人と兄弟たちが相談しました。話し合いの結果は、両親は本当は長男と同居したがっているのだから、嫌だといわれても無理に荷物を運んで両親と同居してくれ、そしたら法事のことはなんとか後でフォローするからというものでした。私はそんなことで問題が解決するとはとても思えませんでしたが、主人にどうするのかと聞かれ、「私はあなたがそうしたいのならそうします。妻は夫に従えと聖書に書いてあるので私はあなたの決めたことに従おうと思っていました。でも、本当は夫の上にいるのはイエス様で、そして今の私は、自分がどうしたいこうしたいという思いは一つもなく、ただイエス様に従いたいの。だから両親と話した後は軽井沢のバイブルキャンプに連れていってほしい」と頼みました。そして次の日、朝早く私たち家族は主人の家に向かいました。ところが主人の家に

は誰もいません。そのときはっと気がついたのは、両親は朝早くからまた私を責めようと思って出かけ、私たちとちょうど入れ違いになったのです。私たちは春日部に戻り、主人はふと思い立ち、私と子どもだけを近くの姉妹の家に預け、自分ひとりでアパートに行きました。そして親と話したところ、黒か白か親の言うことをすべて聞けと言われ、主人はもうだめだと思いそのまま飛び出し、私と子どもを連れて軽井沢に向かいました。今から二十年前の十一月三日、その日はちょうどキャンプの始まる日でした。いつ生まれてもおかしくない大きなおなかを抱えた私と子ども二人、仕事もなにもかも捨ててどこにも行くあてもないまま私たちは御代田のゲストハウスに一か月とどまり、主人は救われました。すべてのことは、主の御手によってなされました。主人は開業し、能力もあり自信満々で歩んできましたが、実は自分がみじめで頼りなくなにもできない者であるということを初めて知らされ、信仰をもつことができるようになりました。主人が救われたことは私にとって大いなる奇跡であり、どんなに感謝してもたりません。

それから一年の間、失業状態の主人は毎日集会通いをすることができました。私たちは一部屋だけの小さなアパートにひっそりと住んでいましたが、そこはまるで天国のように思われました。

何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイ　6・31〜33）

私たちは、ほとんど蓄えはなかったのですが、必要な物はすべて満たされました。

それから数年して、みことばに示され、私の実家がある群馬県伊勢崎に帰ってきました。私には障害のある兄がいます。実家に帰ってきてからその兄を御代田のキャンプに連れていきたいと思い、弟を無理に説得し介護を頼み、御代田に一緒に行きました。そこで私たちのテーブルを兄弟姉妹が囲んでくださっていろいろなみことばを示してくれました。そのとき、突然弟が声をあげて泣き出しました。私たちは一同なにが起こったのかわからずびっくりしました。

その聖書の箇所は、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ　43・4）と、「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」（イザヤ43・7）でした。

弟はいつも兄と一心同体の気持ちを持っており、なぜ自分はなに不自由ない体で好きなことをしているのに、兄は障害があり不自由な身なのか。なぜ、自分ではなく兄なのだ、といつも自分を重ね合わせて考えていました。弟はこのみことばに出会ったとき、突然一切の疑問が溶け、イエス様は心から兄を愛していること、人間に不公平はなく障害のある兄を通してイエス様は栄光を現わしてくれるということが心でわかって声を上げて泣いたのでした。そして、「まあちゃん（兄の名前）。イエス様がこんなにもまあちゃんを愛してくれているなら一緒に受洗しよう」といって翌朝、二人して受洗の恵みに預かりました。翌日、家に帰って両親にその報告をすると、両親、とくに母は思ってもみなかったことなのですっかり動転してしまいました。それでも母はその信仰を認めてくれました。

私たちは、両親の敷地に家を建て、そこで伊勢崎集会を始めました。ときを同じくしてそのころ、母の体の具合が悪くなり、ちょっとしたことで骨折す

るようになりました。医者に診てもらったところ、多発性骨髄腫という癌だということがわかりました。私はそのとき初めてここに家を建てさせられたもう一つの理由がわかりました。

母はそんななかでも気丈に動揺は見せませんでした。元来、楽天的なことに加えて障害のある兄のことや、古くから続く家の嫁としての気概でとても強くなっていたのだと思います。母は「嫁として私は先祖代々のお墓を守っていかなくてはならない努めがある。だから私にはイエス様はすすめないで」と断固拒否していました。そして今から六年前、兄は風邪がもとで突然天に召されました。本当にあっという間の出来事でした。そして驚いたことにはそのとき、頑固な母の方から私たちに「まあちゃんは受洗しているから、葬儀は集会でやってもらいたい」と言ってくれました。当然親戚からは随分非難されましたが母が防波堤となってくれ、「まあちゃんは私たちとは違うから。私のときは絶対に仏式でするから」と説得してくれました。そして群馬で初めてベック兄の司式による葬儀が執り行なわれました。兄がこんなに早く天に召されるとは誰も予想しなかったことで、主の備えの確かさに感謝しました。

母は病気になって十三年間、最後は癌の末期で痛みとの闘いの毎日でした。母は強い人ですからそんな苦しいなかでも周りの人に、自分の葬儀は仏式でと頼み、弱みは見せませんでした。おととし母は大量に下血し、救急車で運び込まれた病棟でひとりのクリスチャンの看護師さんと出会いました。その方のお母さんも母と同じ多発性骨髄腫で亡くなられたそうで、亡くなる直前イエス様を受け入れ安らかに天に召されたということでした。その看護師さんは、仕事明けや仕事の合間に母のところに来て、母のために祈ってくださいました。母は最期まで嫁としての気概とイエス様を受け入れたいという思いとの間で揺れ動いていましたが、最期は主の御約束通りに、私たちの祈りに心を合わせて、アーメンと言って天国に旅立っていきました。本当に感謝でした。

私のような小さなものに対してさえ、主はいつも変わらない愛と真実を示してくださいました。主に心から感謝します。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

（詩篇　138・8）

一九五二年、群馬県生まれ
前橋女子高校、東京歯科大学、歯科医師、夫・克彦



天国に行けたらうれしい

古田　真理子

古田真理子姉妹は二〇一〇年十二月に天国へ旅立たれました。本稿はその二ヶ月前、吉祥寺学び会で語られたお証しです。



右、古田真理子さん

一九九四年、友人のバイクに乗せてもらっていた十八歳の長男が交通事故で脳挫傷の重症を負いました。明日までもたないでしょうと医師から告げられ、呆然としました。

何とか命は取り止めたものの、意識は一度も回復せず、心肺停止もあり、約二年間救急病院で先の見えない入院生活を送りました。回復の見込みがないので転院して欲しいと言われたとき、在宅介護に踏み切り、必死に二十四時間介護しました。その間、二男は中学、高校と思春期で一番難しい時期でしたが、介護も手伝ってくれ、おだやかでやさしく、勉強もできるとても良い子でした。二男の成長だけが心の支えでした。

長男も全身状態は安定していました。そんな中で重度後遺症障害者専門病院への入院の話があり、五年という契約で入院させました。その間に、大学二年生だった二男が今までの自分は間違っていたと言い、家に引きこもってしまいました。二男は、両親、特に母親に心配をかけてはいけないという一心で、必死で良い子を演じていました。限界だったのだと思います。後悔しても、もう取り返しはつきませんでした。

心労が重なり、私はうつ病になり、薬に頼る日が続きました。絶望感はいよいよ強まり、何でもいいから楽になりたい、朝目覚めることなく永眠したいと心から願いましたが、二人の息子を残して一人だけ死ぬことはできませんでした。一家心中を考え、毎晩のように夫に懇願したのですが、がんばろうと励まされ、実行に移すことができませんでした。

長男が入院して始めた仕事は現実を忘れられる唯一の時間でした。しかし、何事もないかのように職場でふるまうことに、また日増しに強くなっていく絶望感のため、まっ黒な穴の底に落ちたようでした。

そんなとき、職場の隣の席に集会の後藤さんが来られました。クリスチャンであることをお聞きし、クリスチャンは死後どうなるのかと尋ねたところ、「天国です」と言われました。私は、死後は「無」だと思っていましたので、いい大人がよく天国なんて信じられるも

のだと、なかばあきれました。でも、「天国」という言葉が頭の隅に引っかかり、その思いが「長男が天国に行けたらうれしい」という思いに変わり、一条のかすかな光のように私の心に差し込みました。長男は十年以上も植物状態で、私は「どうして」、「なぜ」、長男の人生は何なのか」と、どうしようもない思いでした。

信仰の本を読みたいと後藤さんに伝えたところ、本と聖書と、ベックさんのテープも頂きました。はじめに、後藤兄姉の載っている「光よあれ」を読み終えたとき、突然「私は何て自己中心的だったのだろうか。自分を世界一不幸な母親だと嘆いていたけれど、一番かわいそうなのは息子達なのに」という思いが込み上げてきました。

頂いた本を必死で読み続け、テープも十回以上聴きました。でも何もわかりませんでした。しかし、後藤さんがベックさんにお会いするという機会を作ってくださり、ベックさんは、息子の事故は「因果応報ではない、息子は家族の宝」だと言ってくださいました。また、一人の姉妹に連れられて吉祥寺の礼拝に参加しました。

ポツ、ポツと礼拝、学びの会に参加するようになりましたが、仕事を持っていたため体力的に疲れ果て、お給料・仕事を取るか、集会を優先するかと悩みました。こうして、はっきりわかる答えをくださいと真剣に祈りました。その日の夕方、職場で四針もぬう怪我をしました。ここにみこころがあると思い、一か月後に退職しました。十月のドイツキャンプに導かれ、そこで試練は福音の裏返しであるという思いが与えられました。退職して一年ほどになりますが、正直よくわからないけれども歩んできたのは、主を求めざるをえない必死な思いがあったからだと思います。

祐天寺の最後の家庭集会でのベックさんのメッセージには、始めから終わりまで涙が止まりませんでした。洗礼を受けたいという思いが初めて与えられました。今になってわかるのですが、私を絶望の暗闇から救ってくださったイエス様のみわざは最高と涙する思いです。

長男の植物状態は十七年目になり、次男は二十七歳の今も外に出られません。私は、この現実が解決されますようにと祈ってきましたが、自分の祈りが間違っていることを感じていました。平安がないのです。しかし、どこが間違っているのかどうしてもわかりませんでした。それが「実を結ぶ命」を読んでわかりました。そこに次のような祈りの言葉が書かれていました。

「私はなぜあなたがこのようにお導きになるのか、もはや知ろうとは思いません。また、何ものも要求したいと思いません。なぜなら、あなたがすべてを最善になしてくださるからです。また、私はこの状態を変えてくださいとも願いません。しかし、唯一のことを願います。どうか、あなたのご臨在を現してください」。これが求めていた祈りだと思いました。こう祈れるようになって心に平安が与えられました。主のご計画だけが成され、主のご栄光のみがほめたたえられますように。

私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。（ピリピ　4・11）

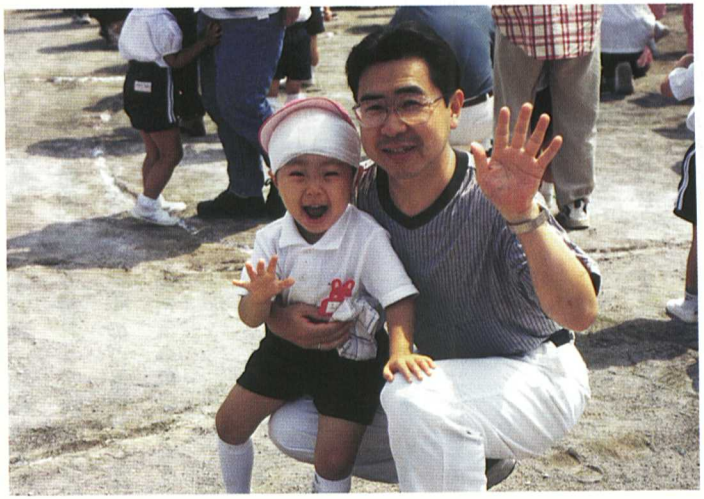
わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・2）

主は生きておられる。（詩篇　18・46）

長野県生まれ
県立伊那弥生ヶ丘高校、信州大学医学部付属高等看護学校卒業
夫・維久、長男・貴史、次男・貴紀

罪に引きかえ二倍のものを

須藤　辰郎



次男、翼君といっしょに

私は一九五四年、熊本県の菊池市に生まれました。平和でのんびりした土地柄でしたが、家ではいつも夫婦喧嘩が絶えず、私が五歳のころついに両親は離婚しました。私は父に引き取られました。心が引き裂かれたように悲しく、いつも母のイメージを追っていました。しばらくして父は現在の母と再婚しました。新しい母は人格者で愛情深い人でした。しかし、心の空洞は満たされませんでした。

さびしい心を持つ私にとって救いとなったのは音楽でした。どんなに悲しいときにも音楽を聴けば慰められました。特に心惹かれたのはバッハで、中でもカンタータ第56番『我喜びて十字架を担わん』は、私の最も大切な音楽でした。魂の奥深いところに何か温かいものが流れ込んでくるようでした。聴けばいつも涙が出て、泣いた後には静かな喜びが残りました。そのようにイエス様は、音楽を通して私を導いてくださったのだと思います。

私の音楽好きは嵩じて、中学から始めたフルートで京都芸術大学を受験しました。課題曲を間違えて用意していったのになぜかトップで受かり、学校始まって以来の天才といわれるようになりました。私の鼻はたちまち高くなり、尊大で生意気な人間になりました。

大学二年、私は突然ノイローゼを発病しました。病院の待合室で不安げに診察を待った日のことを覚えています。病状はどんどん進み、人と会うのが恐ろしく、外出するのが辛くなりました。『離人感』と言って、現実と自分の間に膜のようなものがあり、現実感がなくなる症状に悩まされました。世界は恐怖そのものになりました。そのころの私は、学校を卒業して京都でフルート教室を開いていましたが、昼間から酒を飲んで恐怖をごまかしながらレッスンするありさまなので、生徒は集まらず極貧の生活でした。ついに見かねた友人が、名古屋フィルハーモ

ニー交響楽団のオーディションの話を持ってきてくれました。人生の転機でした。

ノイローゼの私がどうしてオーディションに受かったのか、それは神様だけがご存知です。私を待っていたのはノイローゼのさらなる進行でした。ステージが恐く、精神安定剤を飲んで演奏に臨まなければなりませんでした。第一フルート奏者は大学の先輩が勤めていましたが、この人からは毎日のように陰湿ないじめを受けました。最終的に、フルートがうまく吹ける、という自信すらなくしました。私生活においても最悪でした。私は不倫の中にありました。相手の人は私の音楽上の先生でもありました。「あなたの音楽はダメです。留学して一から勉強しなさい」と宣告され、しぶしぶ留学の準備を始めました。そんな私が文化庁の在外研修員としてドイツに留学できたことは奇跡というほかありません。しかもシュトゥッツガルトでした。そこはベック兄の出身地です。イエス様の救いのご計画が着々と進められていました。

留学先で私は一人のフルート奏者に出会いました。あるとき、彼は目を輝かせてこう言うのです。「須藤さん。僕は昨日、ベックさんという人に会って救われました。一緒に会いにいきませんか」。ベック兄はそのころドイツに里帰りしておられたのです。手を引かれるようにして私はアイドリンゲンに行きました。すべてが驚きでした。ベック兄は会うなり「辰郎、よく来たね」と抱きしめてくださいました。この人は何かが違う。この人からあふれ出る愛はいったいどこからくるのだろう、と思いました。私はベック兄からイエス様の十字架の話を聞き、続けて祈りました。すると不思議なことが起こりました。経験したことのないような喜びが湧き上がってきたのです。灰色だった世界は天然色に変わり、私は救われたのです。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ 10・10）

私は不倫のことをベックさんに話しました。ベックさんは、「すぐに別れなさい」とおっしゃいました。日本に手紙を書きました。相手の女性は怒り狂って、ドイツに乗り込んできました。入れ替わりに私は日本に逃げ帰りました。彼女は後日、失意の中でベックさんに出会い救われたと聞きました。本当に主は凄い！ただそのひとことです。

救われた私は日本に帰り、オーケストラもやめて吉祥寺集会の近くに住みました。しかし私はまだまだ砕かれておらず、試練は続きました。車の免許を取りたてのころ、一時停止の見落としで人身事故を起こしました。荻窪警察署に一週間留置された後、東京拘置所に移され、保釈で外に出ました。ところが、家に帰った翌日、集会の兄弟方から呼び出されて、次のように言われました。「あなたは深夜、ある既婚の姉妹に電話をして、これから行ってよいかと言ったでしょう」全く身に覚えのないことでした。「知りません」と答えましたが、結局一年間の聖餐禁止処分になりました。このことが人から出たのであれば私は集会から去ったでしょう。でも、そのときなぜか、これは主から出ている、と思えたのです。むろん私は犯人ではなかったのですが、集会で自分勝手に行動し、何人かの人を苦しめた事実があったのです。ですから処分に甘んじました。後に真犯人らしき人がわかったと聞きましたが、私には関係ないことでした。これは私と主との問題でした。その間にも、私が起こした交通事故の遺族の方々との交渉があり、苦しい裁判が続きました。私はぺちゃんこになりました。

人が、若い時に、くびきを負うのは良い。それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。口をちりにつけよ。もしや希望があるかもしれない。自分を打つ者に頬を与え、十分そしりを受けよ。主は、いつまでも見放してはおられない。たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。

（哀歌　3・27〜33）

一年間の辛い聖餐禁止の期間が明けました。私はベック兄に呼ばれ、一人の姉妹が紹介されました。それが愛する妻、セツ子姉妹です。ベック兄は私たちの結婚のために一年間祈ってくださったようです。はからずもセツ子という名は実母の名前と同じでした。イエス様の何という優しいご愛でしょうか。

イサクは、その母サラの天幕にリベカを連れて行き、リベカをめとり、彼女は彼の妻となった。彼は彼女を愛した。イサクは、母のなきあと、慰めを得た。

（創世記24・67）

私がどれほどセツ子姉妹によって慰められ、助けられ、励まされているか、ことばでは言い尽くせません。私たちには四人の可愛い子どもたちが与えられました。主にある家庭がどんなに楽しく祝福に満ちたものであるか、これも言葉にすることができません。さびしい心を抱えた一人の男は心から喜ぶ男に変えられました。ノイローゼは完全に癒され、精神的にも肉体的にも強くなりました。もちろん、その間にもいろいろな出来事がありました。たとえば薬物依存との戦い、次男である翼の交通事故など、戦いのない年はないくらいでした。

両親のことを少しお話したいと思います。

父、辰清は頑固一徹な人でした。私の信仰については苦々しい思いがあったようです。あるとき、ぶ厚い手紙が父から届きました。怒りに震える文字で、辰郎がクリスチャンになったので非常に困っている、お墓はどうするのか、と書かれていました。戦いが始まったと私は思いました。ところが、ちょうどそのころから私は熊本のメッセージ当番になり、三ヶ月に一度、熊本の実家に帰る生活が始まりました。父はとても喜び、ともにビールを酌み交わして昔話に花が咲きました。イエス様について話す雰囲気ではありませんでしたが、それでも次第に父は軟化して、三年くらい経ったころ、急に「お墓はもう処分した」と言うのです。父の上にも主の救いのご計画が着々と進行していたのです。

その後、父は次第に体が弱り、入退院を繰り返すようになりました。圧迫骨折で入院したときのことでした。私はベック兄にお見舞いしてもらいたいと思いました。父は拒否しましたが、母は「お父さんに内緒で来てもらったら」と言うのです。どうなるのか不安でしたが、ベック兄が病室に入るなり、父は喜び驚いてニコニコ顔になりました。ベック兄の話を子どものように素直に「はい」、「はい」と聞いています。信じられませんでした。

あるとき、母から「父の容態がおかしい。家族みんなで来てくれ」という連絡がありました。駆けつけてみると、父は声帯が麻痺して窒息死する寸前でした。気道を確保するため喉が切開され、そこから管が入っていました。医師から『多系統萎縮』という病名が告げられました。肺や心臓の自律神経が麻痺して、突然死する病気でした。私は父に、はっきり救われて欲しいと思いました。母が席をはずした隙に父の耳元でこう言いました。「僕はお父さんの本当の幸せだけを考えているから、真実を言います。お父さんの病気は直りません。先生は突然死する可

能性があると言っています。だから天国の切符をもらうために一緒にイエス様に祈りましょう」。私が悔い改めの祈りをすると、父は声が出ないので、私の手を強く握りました。数ヶ月後にも、娘と一緒にお見舞いにいき、同じような祈りをしました。そのときも父は私の手を握り、目を閉じて大きくうなずきました。

父はその後、一時期かなりよくなり、声もある程度出るまでに回復すると、残念なことにイエス様から心が離れていき、祈りたくない、みことばもききたくない、という態度を示しました。しかし私は父の救いを確信しています。肉と霊は相反しているからです。あのときの父のせっぱつまった祈りをイエス様は聞いておられたと信じます。父は二〇〇九年十一月、天に召されました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒16・31）

父の葬儀は無宗教でしたいと思いましたが、母は仏教文化の根強い土地柄と人間関係に気を使い、どうしてもお寺で、と言いはりました。私は「無宗教でないなら、私たちは出席しません」と告げました。それでも長男である私がいないわけにはいかないので、葬儀の数日間は家に帰り、裏方の仕事をしました。葬儀そのものには出席しませんでしたが、親族の集まりの場で、父がイエス様を信じていたことと、私たちキリスト者はイエス様以外の何ものにも頭を下げることができない旨を証ししました。このとき、信仰の問題では私たちが絶対に妥協しないことを母は知ってくれたと思います。

父の死は、母にとっては試練でした。父のために生きていたような母でしたので、生きる目的がなくなり、しばらくは魂が抜けたようになっていました。

ところが母は、このようなときにも神様に救いを求めることをしませんでした。でも神様は、そんな母を見捨てるようなことはなさいません。転機が訪れました。骨粗鬆症の持病のある母は、あるときゴミを出そうとして圧迫骨折をし、入院せざるをえなくなりました。私たちは、東京と熊本という距離のため、そうそう行くことができません。折しも、ときどき母を訪問してお世話をしてくださっていた従兄弟夫婦が、「もうこれ以上、無理です」と音を上げました。母との同居の潮時だ、と私たちは思いました。母との同居については、妻のセツ子姉妹も賛成でした。妻はすでに母親を亡くしていましたので、私の母を「自分の母のように思って尽くしたい」と言ってくれました。そればかりか、今まで住んでいた私たちの持家を売って、より広い借家に住むことも提案してくれました。私はその家が気に入っていましたが、母のためにはそれが一番よい選択だと思いました。そのころ私は、イエス様から次のみことばをいただいきました。

それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます。」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。（ヨハネ 19・27）

同居までの道のりは長く厳しいものでした。まず母が「うん」と言ってくれません。遠慮があったのでしょう。信仰の違いも大きなものでした。また、私たちの側も簡単なことではありませんでした。妻は負担が増えるでしょうし、子どもたちには転校の問題が待っていました。主は、私たちに次のようなみことばをくださいました。

あなたがたがまだ、あなたの神、主のあなたに与えようとしておられる相続の安住地に行っていないから

である。あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら、あなたがたの神、主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ、私があなたがたに命じるすべての物を持って行かなければならない。

（申命記　12・9～11）

私たちは、住み慣れた家を出なければならないと示されました。みことばにあるヨルダン川を渡るとは、自分に死ぬことを意味します。私たちの様々な思いは、母の救いの前、そして主のみこころの前に、十字架につけられなければなりません。私たちは家を売りに出し、新しい借家を探し始めました。このころには母も同居に積極的な関心を示し始めました。売却の方は買い手が現れ、ローンの手続きに入りました。ところが、住む家がなかなか見つかりません。家族七人が住めるような手頃な物件は皆無でした。今住んでいる家が売れて、引き渡しの時期になってもまだ新しい家が見つからなかったらどうしよう、と不安になりました。そんなころ、娘がインターネットで素晴らしい物件を探し出しました。広い庭が付き、まだ新しいのに比較的安い物件でした。私たちは即決しました。まさに奇跡のような家でした。住んでみると申し分ないほど快適な家でした。

ところが家の売却が頓挫しました。買い手のローン審査が通らなかったのです。売却予定の家には残債があり、新たに借家の家賃も払わねばならず、引越にもお金がかかりました。私たちは非常に厳しい状況に立たされました。そのとき、主は次のみことばをもって私たちを導いてくださいました。

箱をかつぐ者がヨルダン川まで来て、箱をかつぐ祭司たちの足が水ぎわに浸ったとき、――ヨルダン川は刈り入れの間中、岸いっぱいにあふれるのだが――上から流れ下る水はつっ立って、はるかかなたのツァレタンのそばにある町アダムのところで、せきをなして立ち、アラバの海、すなわち塩の海のほうに流れ下る水は完全にせきとめられた。民はエリコに面するところを渡った。主の契約の箱をかつぐ祭司たちがヨルダン川の真中のかわいた地にしっかりと立つうちに、イスラエル全体は、かわいた地を通り、ついに民はすべてヨルダン川を渡り終わった。

（ヨシュア記　3・15～17）

ヨルダン川はその時期、水が岸いっぱいにごうごうと溢れるように流れていました。でも祭司たちが信仰によって一歩足を水に踏み入れたとき、川の水はつっ立って乾いた地が現れ、民はそこを渡ることができました。17節には、祭司たちがヨルダン川の真ん中のかわいた地にしっかり立つうちに、民はヨルダン川を渡り終わった、と書いてあります。そのとき、祭司たちは水を見ないで、自分が立っている乾いた地だけを見ていたに違いありません。乾いた地とは、神様がなしてくださった奇跡です。私たちは、乾いた地だけを見ていよう、と決心しました。

一ヶ月後、母が熊本からやってきました。家はまだ売れていません。でも私たちは、みことばだけに信頼しているので平安です。何より、孫たちに囲まれた母の嬉しそうな顔を見ると、同居して本当によかったと思います。読書が好きな母は、家にあった三浦綾子の本に目を留めて読み始めました。このクリスチャン作家に興味をひかれたようで、私が図書館から借りてくる三浦さんの本を片っ端から読んでいます。強いられてではなく自発的に。イエス様は無理のない形で、救いのご計画を着々と進めておられるようです。私たちは、まだ見ぬ母の救いを見るようにして毎日イエス様に感謝し、主の導きの完全

さ、素晴らしさをほめたたえています。

私は、自分の人生を振り返って、恥多く罪深い歩みに顔から火が出る思いです。しかし、このような者をもイエス様はどれほど深く愛し、憐れんでくださったことでしょう。主の愛と赦しについて思うと、私には庭のドクダミが連想されます。

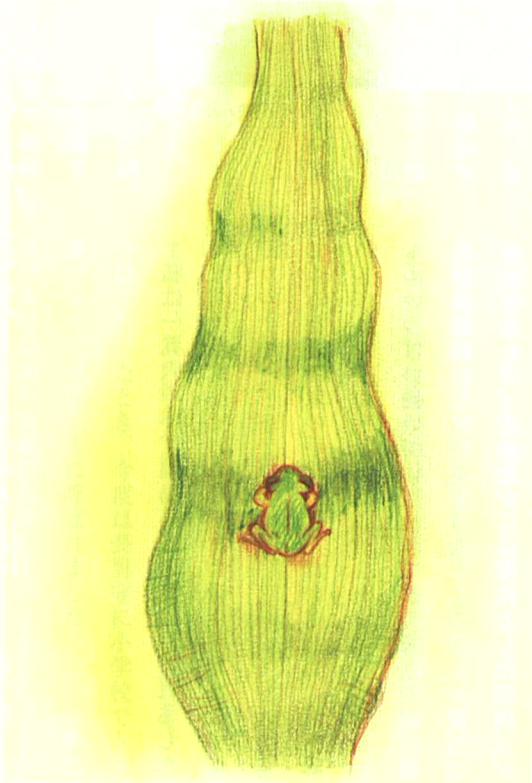
ドクダミは非常にやっかいで、地面から出ている部分の十倍くらいの根を地下に張りめぐらせています。スコップで深く掘り返して根から取っていかなければなりませんが、それでも取りきれず、またすぐに伸びてきます。ドクダミはまたとても臭い草でもあります。しつこくはびこって、臭くて、取っても取ってもまたすぐに伸びてくるものといえば、人間の罪が思い浮かびます。まさに私の罪こそ、根が深く、しつこく、臭く、油断するとすぐに頭をもたげるドクダミのようなものです。

ところが、このドクダミには花が咲きます。それも可愛い純白の花が咲きます。花をよく見ると、四方に花びらが伸びていて、ちょうど十字架の形をしています。人間の罪のようにやっかいなドクダミですが、そのひとつひとつに純白の十字架の花が付いているのです。ここに神様の赦しが象徴されている、と私は思いました。罪深くみじめな私ですが、そんな私をイエス様は深く憐れんでくださり、犯した罪のひとつひとつを十字架の血潮によって聖め、恥をおおってくださるのです。初夏の風にそよぐドクダミの可憐な花を見ながら、私はイエス様の十字架に心から感謝していました。

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。（エペソ　1・7）

「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」（イザヤ　40・1～2）

一九五四年熊本県生まれ。京都芸術大学卒業、名古屋フィルハーモニー交響楽団、東京ＳＩＭ外語研究所勤務。



須藤辰郎

弱さに同情してくださるイエス様

須藤 セツ子



辰郎さんと並んで

私は一九六一年、福島県石川町で生まれました。父は酪農を営んでおりました。母は朝早く起きて乳搾りの手伝いをした後、近くの工場で働き、夕方帰ってくるとまた父の手伝いをしていました。私も妹や弟も、よく家の手伝いをさせられました。母はいつもめいっぱい働いていて疲れておりましたが、父は仕事を趣味にしているようなところがあって、二人はかみあわず、家のなかには殺伐とした雰囲気がありました。高校を卒業して進学のために上京したときは、両親から離れた解放感でいっぱいでした。

二十六歳のとき、私はイエス様に救われました。ときを経るにつれて、子どものときとても嫌だった出来事が、懐かしい大切な思い出としてよみがえってくるのは不思議です。とくに妹や弟が関わっている出来事を思い出すと切ないくらいです。イエス様に救われた後、あたたかい家庭が欲しいです、と涙を流して祈った祈りをイエス様は聞いてくださいました。

主人と結婚して二十一年が経ちました。あっという間でしたが、いろいろな出来事がありました。悩みや試練とともに、たくさんの恵みをイエス様からいただきました。三度の引越しを思いだしながら証しさせていただきます。

私たちは最初の住まいとして、吉祥寺に近い調布市深大寺東町を選びました。この地で、長女ひとみと長男守、次男翼を授かり、七年間ほど暮らしたころ、私たちはもう少し広い部屋を求めました。もちろんイエス様に祈って部屋探しをしましたが、早く引越しをしたい私たちは、集会から少々遠くなってもやむをえない、と自分たちの判断で稲城市のアパートに決めました。けれども、ちいさな子どもを三人を連れてでは、集会に通うことは難しくなりました。私は後悔しました。創世記のなかで、アブラハムが主に訪ねることをせず、自分の判断でエジプトに移り住んだ記述を読んだとき、自分たちのしたことと重なって、主のみこころを損なったのではないかと悔みました。

稲城には四年間住みました。この間、三男広が与えられよろこんだのも束の間、次男翼が、家の前で交通事故にあいました。地面に倒れて、死んだようになっている翼を見たとき、私はひれ伏して、「イエスさまー」と何度も泣き叫びました。私の声を聞いてくださったイエス様は翼の命を返してくださいました。翼の緊急手術、入院、そして退院して、やっとほっとしたとき、今度は長男守に小学校でトラブルがあり、私は先生に呼ばれました。この長男のトラブルは深刻な事態に発展していきました。さらに、ご近所からは、主人のフルートの練習の音に苦情が

おきて、私たちは、引越しを考えざるをえない状況に追い込まれました。

以前の住まいでも、主人のフルートの音で苦情がありました。主人がフルートをする限りはアパートでは苦情がつきまとう。一戸建てを借りるか、買うかしなければ無理だ、と考えた私は、むしろ買う方を求め、主人も結局賛成しました。そして、探しはじめて程なくして不動産屋に紹介された家は、以前住んでいた調布市深大寺東町のすぐ近くでした。自分の思いで引越したけれども、結局元の場所にもどされるのだと思いました。小さいけれども一軒の家を与えられたことを、私たちは本当によろこびました。けれども、私の心の中には小さな影がありました。それは時間が経つほど大きくなり、どうしようもない苦しみになっていきました。それは、主のみこころを損なった、という苦しみでした。それは、翼の再手術で使う費用を保険会社から前払いしてもらい、購入資金の不足分に充てたことでした。これは私が思いついて主人に提案したことでした。主人は迷いながらも、「君が言うことだから」と実行してしまいました。エバがアダムに禁じられた木の実を勧めた、という創世記の話を思い出します。やはり私の罪でした。

このころは本当に苦しい日々でした。翼の再手術は数年後でよいのだから、それまでにはボーナスなどでたまるに違いない、と勝手に考えて実行したことですが、翌年からボーナスはまったく出ませんでした。その間、翼の頭には皮膚と人工の骨の間に水がたまり、常に包帯を巻いて圧迫しなくてはならないばかりか、ときどき注射針でその水を抜き取ってもらわなければなりませんでした。私は自分のやってしまったことを後悔し、主に何度も悔い改めました。もう主は赦してくださらないかもしれない、と思うと三階の窓から飛び降りて死んでしまいたいくらいでした。

このようにして三年近く経ったとき、主はその家に十年近く住まわせてくださり、楽しい思い出をたくさんくださいました。子どもたちも主人も大好きな家でした。私にとっては、痛みの多い十年でもありました。主を恐れる、学びのときでした。

今は何も問題がないかといえば、そうではありません。数年前から我が家は経済的に困窮しており、まだその渦中におります。家のローンの支払いも限界にきていました。母との同居の話があってもなくても、生活を変えなければならない状況にありました。母は私たちの経済的な状態もすべて知ったうえで、同居を決めてくれて、実際に助けてくれています。自分たちの生活のために母を利用するとしたら、それは恐ろしいことです。罪の性質をいまだ持っている私は、その罪から飛び退かなければなりません。私は自分自身を恐れます。

母との同居のことを願って祈りはじめたとき、集会で次の聖書の箇所が引かれてメッセージされました。

憐れみを示してくださいました。ボーナスが支給されたのです。しかも通常の四回分の金額でした。ちょうど、お医者様から、「そろそろ再手術をした方がいいかもしれません」といわれていた時期でしたから、私たちは主にひれ伏して感謝しました。翼の再手術は大成功でした。もう頭に水がたまることもなくなりました。幼い翼を交通事故にあわせてしまったことは、母親である私の責任、翼の体はもう元にはもどらないのだと、いつも心を痛めていました。けれども包帯をする必要がなくなり、髪も伸びて傷口が被われて、元気に屈託なく笑顔を見せてくれる翼を見ているうちに、次第に翼の頭を見てもつらくはなくなり、忘れていられるようになっていきました。私の罪は赦されている、と思えました。

そして、二〇一〇年五月、母との同居を前提に、私たちは三度目の引越しを致しました。主によろこばれないやり方で買ってしまったにもかかわらず、

イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」（ルカ　10・30〜37）

このメッセージのなかで語られたことは、祭司もレビ人も自分のことを考えていたが、サマリヤ人だけが傷を負った人のことを考えていた、ということでした。私の心の中はどうだろう、と主にさぐられました。はじめは母のためにと動きはじめた同居の話なのに、いつの間にか自分に都合よく母に動いて欲しいという思いが生まれていました。祈りました。「イエス様、私は結局、自分のことを第一に考えてしまう者です。どうか私のなかの汚い思いを取り除いてください。まず、母のことを考えることができますように。母との同居のこともどうなっても構いません。みこころだけがなりますように」。このように祈って、主におゆだねすることができました。

そして、母との同居がはじまりました。母はとてもいい人です。いつも私の体を気遣い、自分のことは後でいい、ゆっくりでいい、と言ってくれます。経済的なことが私の心の負担にならないようにと、配慮してくれます。まるで、サマリヤ人とは母のことのようです。私の実の父と母はもう天国にいっていますから、この世でお母さんと呼べる人は主人の母である悦子お母さんだけです。このやさしい母との生活を与えてくださったイエス様に感謝します。

私は、過ちが多い者です。こんな自分とつきあいながら生きていかなくてはならないなんて、うんざりしてしまいます。それなのに笑顔で暮らしていけるのは、こんな私をどこまでも赦して愛してくださるイエス様と、私を主にあって受け入れてくれる夫や家族、兄弟姉妹がそばにいてくれるからです。感謝です。

聖書のみことばを頼りに、イエス様の愛と義を尋ね求めて歩み続けていきます。

主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。

（詩篇145・17〜19）

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

（ヘブル　4・15〜16）

一九六一年福島県生まれ。津田スクールオブビジネス卒、夫・辰郎

自分の十字架を負って天国への道を

内田　愛子



内田愛子姉妹は二〇一一年四月十一日に天国へ旅立たれました。このお証しは二〇〇七年九月十一日の吉祥寺学び会で語られたものですが、愛子姉妹のご葬儀で一部が朗読されました。

私は、「光よあれ第一集」で吉祥寺集会を知りました。主人の仕事で五十歳半ばに東京町田市から愛媛県西条市へ移って間もない頃でした。家族の救いのために祈り続けて来られた主人の姉が「光よあれ第一集」を送ってくださったのです。

「証し」を読み進むうちに、訪ねてみたい思いにかられ、主人の許可を得て吉祥寺集会の礼拝に出席しました。礼拝ではためらうことなく聖餐にあずかりました。涙が止めどなくあふれました。自己紹介の時、私は「今日ようやく、主のみもとに近づく事が出来ました。長い間勝手な道を歩んで来ました事をお許し下さい」と話しました。しかし、こんな言葉が出たのには自分でも驚きました。自分勝手な道を歩んできた事が罪だとは全く知らないままに話したのです。イエス様が導いて下さったのでした。

この二ヶ月後に受洗させて頂きました。聖書の知識はほとんどなかったのですが、これから学んでゆけばよい、と考えました。それから二ヶ月に一度くらい、軽井沢に行くのが恒例となり、愉しい数日を過ごさせて頂きました。帰りはいつも、元住んでいた町田の家に泊まり、翌日吉祥寺集会の学び会に参加しました。

この頃町田の家には、長男がひとりで住んでいました。長男は、大学を出ると音楽関係の会社に入り、ミュージック・ミキサーの仕事につきましたが、十年ほどすぎた頃、退職しました。

その頃私は、まだすべてを「主」におゆだねする信仰はありませんでしたので、不安と心配の中で長男にどう対処すべきかと悩みました。吉祥寺集会の

二階では火曜の午後に「子供のために悩む母の手をつなぐ輪」という会がありました。早速入れて頂き、長男の事を姉妹方に祈って頂きました。

むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる。（箴言　29・15）

子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。（箴言　13・24）

このみことばが与えられ、「主」に従う決意をしました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

このみことばを心の支えとして祈りました。主人も子どものために両親が心を一つにして祈る事が大事だと協力してくれました。それからは、「主よ、どうぞ彼にとって最善の所へお導き下さい」と必死で祈りました。この時、私が求めた最善の道とは彼が元気で吉祥寺集会に導かれる事でした。しかし、次第に精神的にも経済的にも追いつめられ、苦しみも深刻になって来たのでしょうか。一九九二年、四十四歳の春、短い遺書を残して自らこの世を去って行きました。

聖書に従ってきびしい態度を取り続けた私を恨んだかも知れません。私は悲しみの中でイエス様なぜですか、なぜ死を許されたのですか、なぜ止めてくださらなかったのですか、と問いかけました。しかし、すぐに、この態度は「主」に逆らう事であると気付かせられ、「主よ、ごめんなさい」と悔い改め、謝りました。こうして、彼は天国に引き上

げられ、この世の病や苦しみから解放されて、イエス様のみもとで安らいでいると確信するようになりました。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（マタイ　16・24）

次男隆、長女多津子はそれぞれ結婚していますが、救われる前の私をよく知っており、私がどんなふうに変わったかも見ております。イエス様のなされたみわざをしっかりと見せられていますから、救われる日もそう遠くないと望みを抱いて待っております。

主人は長男亡き後、国際福音センター献堂式の日に受洗にあずかりました。余り積極的ではなかったようですが、受洗後、顔の表情が明るくなり、おだやかないい顔になって来ました。心から感謝致しました。

隆のよきパートナーである万里子さんは、一九八八年のクリスマスの日に吉祥寺集会で洗礼にあずかりました。私は主人の救いの事しか考えていませんでしたので「主」の御計画に驚きましたが、こんなうれしい事はございませんでした。

私は六十歳で受洗してから十年間、元気で西条から旧軽井沢そして吉祥寺へと通い続けました。当時、四国四県では愛媛だけ集会がなかったのです。それをミンヘン姉妹に伺いましたら、「あなたがやらなくて誰がやるんですか」とのお返事にびっくりしました。そんな事が私に出来るわけがないと思いながら、知人を招いてケーキの会を始めました。ケーキを作り、焼きあがるまでの間、兄弟のテープを聞きながら聖書を読みました。回を重ねるうちに人数も増え、吉祥寺から兄弟がメッセージに来て下さる事になりました。夢のようで涙がこぼれました。しか

し、「十字架の意味もよくわからぬ者に伝道は出来ない」と、「主」に示され、十字架の意味を教えてください、と必死に祈り続けました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

ある夜、ベック兄のテープからこのみことばが流れて来ました。その時私は頭から足先まで電流が走ったように体がしびれました。これが十字架の意味だととっさに示されました。それからというもの毎朝イエス様のあがないの十字架に感謝する時涙が出るようになったのです。

さて、私どもは七十歳になった時に埼玉に移り春日部集会に集うようになりました。ところがその喜びも束の間、あれだけ元気だった私に次々と病が来るようになったのです。幸い、「すべての事は主から来る」という事を確信しておりましたので、これは私に取って必要な試練である、と受止める事が出来ました。

それまでは「病気の時はお互い様ね」などとそれほど感謝の気持ちもなかったのでした。「主」はこの年老いた、信仰の未熟な者をあわれんで下さったのでしょう。手も足も出ぬほど、苦しめてくださいました。「弱いときにこそ、強いのです」のみことば通り主は働かれました。主人は黙々と介護してくれました。このときに至り、はじめて主人がやさしい、思いやりのある人だとわかり、心底から詫びました。そしてイエス様に感謝しました。苦しみを通して愛のない者にようやく、神の愛が入ったのです。

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。（1コリント　13・13）

愛は結びの帯として完全なものです。

（コロサイ　3・14）

病まなければ聞き得ぬみことばをたくさん頂き、苦しんだ事は私にとって幸いでした。これで当分病から解放されると思っていたところ、八十歳になって癌系の病を頂きました。来るべきものが来たのです。抗癌剤と放射線治療を受け、葬儀の準備をしなければと急に忙しくなりました。しかし、その後、元気になって現在に到っております。「主」はいつも、あわや、と言う所で守って下さいました。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

（伝道者　12・1）

とても大好きなみことばですが、残念ながら私は、人生の夕暮れに至り、ようやくイエス様に拾って頂き、救われ、神の愛によって変えられたのです。イエス様に出会って、何物にもかえがたい大切な宝物を頂いたことを心から感謝しております。

「主」を知らず、苦しんでいる方、目に見えぬ神など信じられない、と救いの手を拒んでいられる方、特に老境に入ってもまだ、自分の力でやっていけると自信を持っておられる方、そして愛する者の死別の悲しみを抱きつつ悶々としている方。こういう方々が私の周りに何人もいらっしゃいます。そして私は毎日この方々のために祈っております。悲しみに陥った時は、神に呼ばわりを求めなければならない事、祈らずして悲しみを喜びに変える事は出来ない事、

また姑息な手段で悲しみを紛らわそうとしても逃れられるものではない事を、この方々にぜひ伝えさせて下さいとイエス様に祈っております。「わざわいの日が来ないうちに、また『何の喜びもない。』と言う年月が近づく前に」ぜひ、イエス・キリストの神を信じて頂きたいのです。「老いるのに術はいらぬ、老いに耐える事こそ至難のわざ」、これはゲーテの言葉ですが全くその通りです。一年ごとに衰えてゆく身体に襲って来る病。そして必ず訪れる死。これらをどう受止めるかは、信仰を持つ人と持たぬ人では天と地ほどの違いがあります。イエス様に出会わなかったら、さぞ、みじめな晩年だったでしょう私が、主人といたわり合い助け合って、日々、平安に暮らしております。こんなに幸せにして下さった方はどんな方かをぜひ知って頂きたいのです。よく解らないけど先ずは受け入れてみようという態度をお取りになって下さい。そしたら行く手に全く別の人生が待っている事を断言いたします。

今日九月十一日は、私の八十五回目の誕生日でございます。かつては罪深い者であった私も今は「主」によって生かされて生きる日々を喜びながら、天国へ旅立つ日を待っております。この場をお借りしてベック兄姉、はじめ多くの敬愛する、兄弟姉妹の皆様方に、これまで長い間お交わりを頂いた事、又苦しい時のお祈りや、おはげましを下さいました事、を心から感謝申し上げます。そして天国でまたゆっくりと再会出来ますのを楽しみにしてまいります。

一九二二年、新潟県柏崎市生まれ
新潟県立柏崎高等女学校（現柏崎常盤高校）、実践女子専門学校（現実践女子大）卒
夫・眞（まこと）、長男・順（一九九二年召天）、
次男・隆、長女・佐藤多津子



左から2人目、内田愛子さん

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



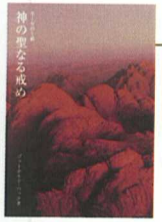
西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ　―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
お気軽にお申し込みください。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

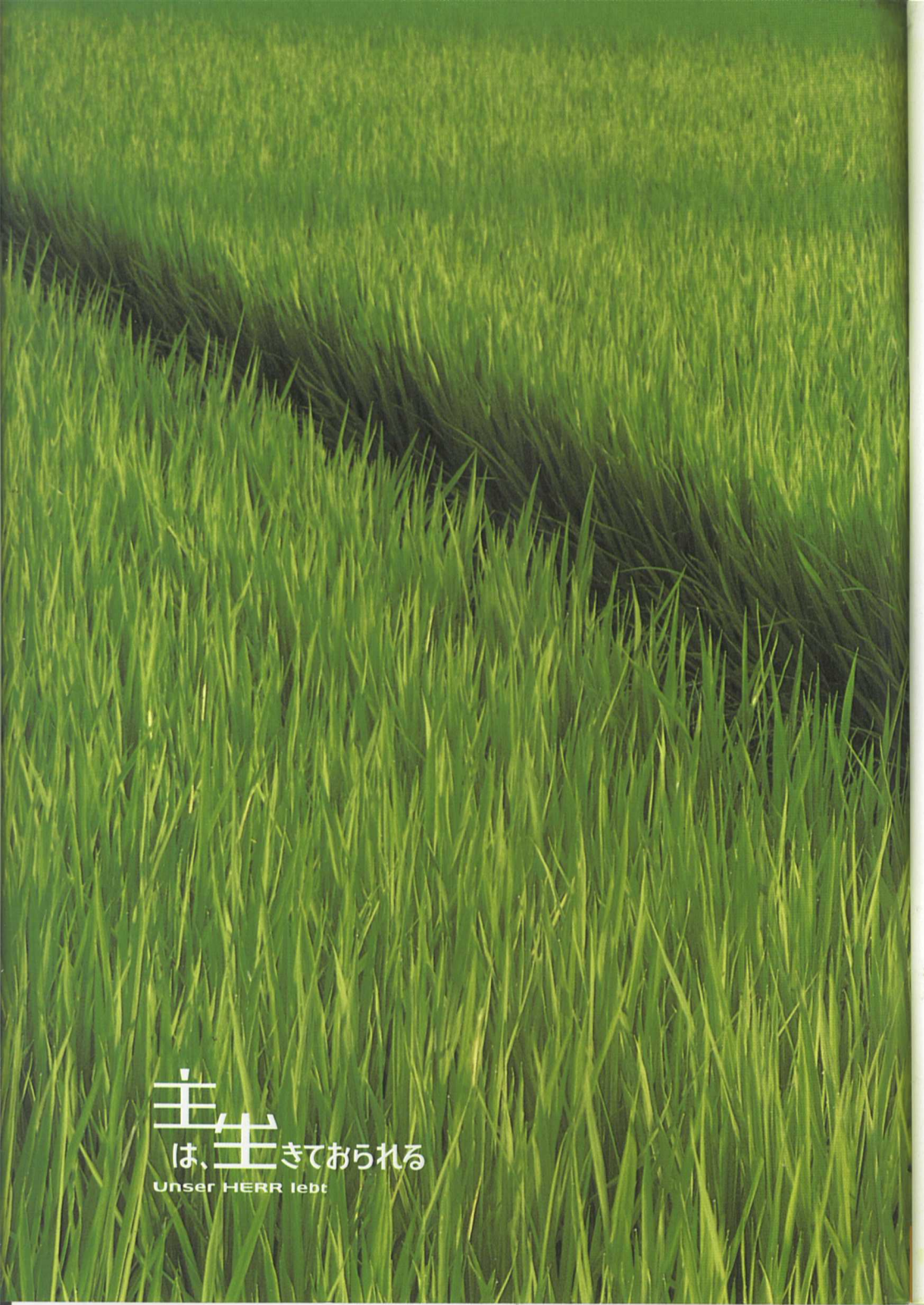
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第21号

定価100円（本体95円）　2011年7月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
イラスト	向井則博
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。